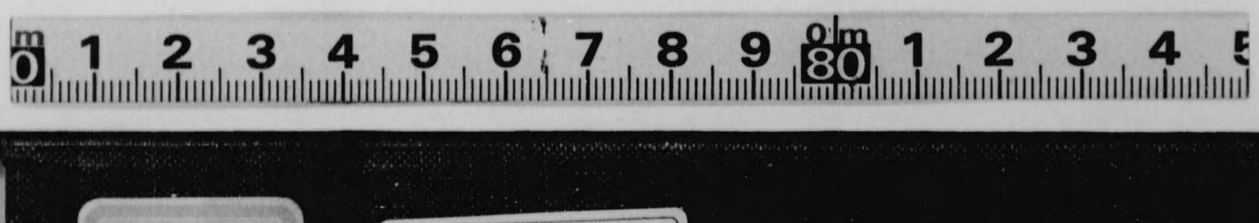
始



376
71
0 複写

青島から飛び出して

洛陽堂版

376-71

青島から飛び出して

著 ヨシッリブ・ルテング 獨乙海軍大尉
序 岡松静雄 ・佐大軍海
譯欽 林若 ・佐中軍海
譯助 幸政廣・ツーアブォータスマ

洛陽堂版

大正
7. 9. 2
内交

序

グンテル・プリユツシヨーは獨逸海軍の一青年士官也。膠州灣防禦軍に參加し飛行機將校として夙に勇名を彼我兩軍の間に馳す。大正三年十一月六日青島要塞將に陷落せんとするや、城將マイヤー！ワルデツクの旨を含みルンプラー！タウベを驅りて重圍を脫出し使命を果したる後南京に抑留の身となりしが、祖國の興廢を餘所に見て空しく長江の月を眺むるに忍びず、姿をかへて逸出し流離艱難二ヶ年の後、漸く本志を達して故山に歸著し、再戰線に立つことを得たり。此間或は瀕死の狀をよそほひて日本官憲の眼を欺き、或は勞働者の群に投じて米大陸を横ぎり、一度英人に看破せられて捕虜となりしも監倉を破りて脫走する等龍の腮にふれ虎

の尾をふみたること幾回なるかを知らず。歸來彼は軍務の傍「ペン」をとりて經歷を叙し、題して「青島飛行家の冒險」といふ。之を一讀するに壯絶快絶、事實は正に小説よりも奇なり。

獨逸の野心と狂暴とは惡みても尚餘ありと雖、天下を敵として屈せざる獨人の意氣に至りては之を壯とせざるべからず。而して其最豪宕なるもの吾人之をブリウショーに見る。今や我國上下擧つて安逸に耽り、神洲の正氣漸く地を拂はんとす。此時に當り友人若林欽君等慨然筆を揮つて此書を譯し世上に刊行す。其意蓋し他山の石を以て玉を琢くにあるか。聊感想を記して以て序文に代ふと云爾。

大正六年十二月下浣　　海軍大佐　松岡靜雄

青島から飛出して

目次

一　飛行家の一喜一憂……一
二　青島に於ける光輝ある日時……二九
三　戰爭の警報と余の鳩……四二
四　日本人の戲謔……七五
五　余の空中戰……八九
六　歡呼喝采の聲……一〇二
七　青島に於ける最後の日……一二
八　支那の泥田に陷つて……一三九
九　マツクガルヴヰン氏の魚肉中毒……一四一

十　逮捕の憂目……一八〇
十一　俘虜生活の苦痛……一九九
十二　暗夜の逃走……二五九
十三　テームズ河畔の逍遙……二六八
十四　密航の冒險……三一八
十五　自由の首途……三二一
十六　祖國への歸着……三二七

青島から飛出して目次終

青島から飛出して

獨逸海軍大尉グンテル、ブリツショー原著
日本マスター、オブ、アーツ　若林欽　廣政幸助　共譯

一　飛行家の一喜一憂

余は永らく海外に滯在して先頃久し振で故郷シヴエーリンに到着した時は千九百十二年の八月であつた。その前余は數週間英國に滯在した。滯英中は倫敦に在りて其豐富なる美術品の研究に身を委ね、毎日市内若くは近郊の地を逍遙したのであつた。其際余は此二年餘の旅行を漸く終つたのであるが、余は本國に歸着する迄、箇樣に此旅行が有益なるものにならうとは全く思はなかつたのである。

此旅行中余は一種の感慨と憂悶の情とに襲はれて居たのであつた。そして余がシヴエーリンに着くと、伯父が迎へに來て居たが、余は數日來深く心中に秘藏して居た事柄を欠にも出さなかつた。と言ふのは近日中の海軍の秋期異動命令が發表される筈になつて居るから、余に取つては數年來の宿望が果して達せらるゝか否や、余の死活に關する重要の問題が解決さるゝ筈なのだ。

伯父「お前近い中に何處へ行くのか知つてるか」

余は恰かも電氣にでも打たれた樣に感じた。

「イヤ、知りません」

「そうか、誠に目出度い事だ。海軍飛行部隊に行くのだらう」

余は嬉しさの餘り、市街の眞唯中で思はず雀躍せんばかりであつたが、でも至極温厚なシヴエーリンの市民を騒がすに忍びないので思ひ止まつた。

到頭余の願は達せられたのだ！

と余は心中竊かに點頭いた。賜暇歸省の數日間は丸で夢の樣に過ぎ去つた。そして余は戰況視察員として將來活動すべき一年有半の新任務に就くべき準備の爲めに、意氣揚々として海軍兵學校に歸校した。余は今度ほど、愉快な辭令を握つたことがないから、喜び勇んで旅裝を整へ指折り數へて出發の日を待つた。

一度出發の數日前、同僚の一人がやつて來て、耳を劈く如き大聲で言つた。

「君は是から從事すべき新任務を最早知つて居るか」

「ウン、余は飛行家だ」

「オイ、君はまだ全く知る筈がない。君は幸福な男だよ、君はソレ青島へ行くんだぞ！」

余は之を聞て痛快に堪えず感極まつて言葉が出なかつた。此ときこそ一通りでない間抜け顏をして居たらうと後に考へた。

「そうだ、青島だよ、それも飛行家としてだ！君は幸運兒だ、青島に於ける最初の

海軍飛行家になるんだ！」

余が其筋からの通告に接しない中は、眞逆此事實を信じなかつたとしても、我同僚の言葉を聞いて非常に嬉しく思つた。それは何も不思議でもなかつたのだ。所が是は全く事實であつた。余は身分不相應の僥倖を得たのであつた。

夫より猶ほ三ヶ月をキールに待ち明して、到頭千九百十四年一月一日に、余の身は熱愛する伯林の都に辿り着いた。

余が其頃の興奮狀態と言つたら、自分ながら意氣地がないのに呆れた。如何しても我心で我行動を制馭する事は出來なかつた。一月二日といふに、最早余はヨハニスタールにやつて來た。そして即刻飛行術の練習を始めることが出來ると思つて居た。所が余の練習間際の多くの感想も飛行練習生と同樣であつた。其時余は始めて、古くから飛行界に行はれて居る經驗上の秘訣を知つたのである。それは精神の鎭靜があつて始めて飛行することが出來るのだ、又飛ばうとする人は、誰よりも先きに

待つといふことを知らなければならぬといふ事である。

待てよ、待てよ、重ねて待てよ。全飛行の八割は唯待つことばかりだ。そして虛心平氣で靜かに持堪ふることが最も肝腎である。

この時恰かも滿天暗澹として搔曇り、飛雪は繽紛として飄へつた。忽ちにして飛行場の全部は深き積雪の下に埋もれた。飛行は不可能となつた。夫より數週間の間余は毎朝家を出るとき斯う思つた。「モウ雪は消えたに違ひない」所が飛行場にやつて來ると、何時も駄目で、午後には失望の心を抑へつゝ茫然と歸宅したのであつた。

二月に入ると漸く好天氣になつた。そこで二月一日に余は意氣揚々として、余の「鳩」の前部に座乘した、そして初めて快晴な日光を浴びて風輕く氣爽やかな冬の朝の蒼空に昇つた。其頃天候は毎日晴天が打續いたので、飽かず疲れず、毎日毎日練習した。

此日頃飛行といふ感念が一刻も余の腦裡を去らないで、重く余の心を壓して居た

が、それは間もなく蟬脱して了つた。そして第三日目に漸く單獨飛行を許された時には、我心に誇をさへ感じたのであつた。二日間程單獨飛行をして見ると、或るとき天候の麗かな土曜日の午後に余等青年飛行家を敎育するに熱心な敎師のヴエルナー、ヴキーチング氏がやつて來て、

「中尉殿、如何でせう、貴殿はすぐ操縱法の試驗をお受けになりませんか。立派なレコードを御作りになりませうが！」と言つた。

「無論、其點は私も保證します」

夫れより十分後には余は既に機上の人となつて居た、そして余の「鳩」を操縱して規定の旋回運動を空中に行つた。かくて寒冷の蒼空を彼此各處となく旋回して、余は實に痛快を感じた。最後の着陸試驗も無事に終了して、敎師が莞爾として余の側に來て祝意を表しながら、再三握手を行つた時には、余の心中に名狀し難い喜悅を覺え、無上の滿足と幸福とを全身に被つた樣に思つたのである。

今や余は一人竝の飛行機の操縱者になつたのである。最初の練習期は既に經過した。今日以後は毎日自由に單獨で百馬力の大飛行機を操縱して、我心の儘に飛行する事が出來るのである。

當時余は特別の試驗に依て多大の歡喜を覺えた。嚮きに、我飛行界の先覺たるルンプラー氏は格段の昇騰力を有する新式の單葉飛行機を製作したが、彼は此機を用ひて從來何人も未だ實驗せざる最高のレコードを得たのである。我が有名なる飛行家リンネコーゲル氏がルンプラー式飛行機を操縱する由を聞いて居た。然るにリ氏は偶余に其證人として切に同乘を乞ふた。そのとき余は欣然快諾を與へたことは勿論言ふ迄もない。

二月の末頃であつた或る日、余等兩人はルンプラー式飛行機に搭乘して第一回の飛行を試みた。余等は酷寒を防ぐ爲に身體を厚く包裝して、機上の人となつたが、始め地上を少し滑走した後で胡蝶の樣に輕快に空中に昇騰すると、群衆は頻に羨望

の眼を以て、遙に見上げながら、拍手喝采した。余は時計を手にして高度を觀測して居た、そして十五分の後には既に二千メートルの高さに達した。但し此高度は當時に於て異常なる成績であつたのである。かく昇騰する際、機體の進行が漸く緩慢になつて來た。而して空氣は甚だ不安定となつた。余等は羽毛の如く强烈な風力に煽られて上下の動搖を甚だしく感じた。一時間の後余等は遂に四千メートルの高さに達したが、其時モーターはプッ〳〵と息を吐いてストライキを始め、數秒時の後には俄に空轉をなして動かなくなつて了つた。そこで余等は螺旋形に急速に地上へ向つて滑り下り、數分後には無事飛行場に著陸した。

此とき何故にモーターが動かぬやうになつたかと云ふに、當日は寒さが餘りに烈しかつたので、モーターは譯もなく凝結したのであるが、此の如き故障は從來考へつかなかつたのである。そこで兩人はモーターを調べて熱心に改良を加へ、數日を經て再び同樣の昇騰試驗を行つたが、今度は何等の故障を見ず、至極幸運であつた。

余等は徐々に且つ確實にズン〳〵高度を增して昇つた。

高度計は四千メートル、四千二百メートル、四千五百メートルと示した。前回には四千メートルを昇つてから、モーターに意外の故障を生じたが、今日は何事も起らない。余等の幸福は實に有り難い。兩人は互に顏を見合して莞爾とした。されど寒さは嚴しいので頗る堪へ難く思はれた。余の信ずる處では、最も厚い革服を着けて居ても、凛烈な寒風に對しては、殆んど防寒の用をなさなかつた。

機體は益々高空に飛揚がり、四千八百メートル、四千九百メートルとなつた。今や豫定の高度まで僅かに四百メートルを餘すのみである。瞬時にして豫期の目的は達せられんとするのである。然るに不思議にも機體は何か魔術にでもかゝつた樣に失れより僅か一メートルの昇騰もできなくなつた。噫かくなつては萬事休すだ。而かも運轉材料が缺乏を告げて、再びモーターの回轉は俄に已んだ。今回は四千九百メートルの高空に於て動作を中止したのである。

余等はこの際一滴のベンジン油を用ひないで、首尾能く着陸したが、シリンダーは丸で氷柱の樣に凍結して居た。

余等は全部の目的を達したのではないが、然し立派な効果は收められたのである。かくて余等は獨逸の飛行界の高度試驗に赫々たる名聲を博したのである。

此成功が一種の刺激となつて、余等は更に最後の目的を達せんと決心した。三月の初旬に、快晴の天候に乘じて再び新らしい實驗を行ふやうになつた。そこで前回よりも一層厚く機械を包裝し、寒暖計を用意して（併し酸素裝置はしなかつた）余等は第三回の試驗を行ふ爲めに飛行場の地上を離れた。

最初の高度には安樂に達した。雲の大集團は空中に漂ふて居り、溫度は極めて低かつた。我々が雲幕を魚貫して高く昇ると、機體は漸く日光の照り輝ける上層の空中に突入した。時に余等は痛快至極の實驗をしたのである。と云ふのは外でもない。余等は突然壯麗な日光を浴びながら、ツエペリン飛行船が眼前に遊弋して居るのを

認めた。此大飛行船も當日恰も高度飛行を行ふ爲めに昇騰して居たのである。

嗚呼三千メートル以上の高空で、余等飛行家が此の如き邂逅をなすとは、何と驚ろくべき奇遇ではあるまいか。人間社會のあらゆる業務から遠く離れて、日々の心配や苦勞を高く超越して二つの機械——獨逸國の智力と能力とを斯くも鮮明に表示する二つの機械が相會したのである。

余等は大飛行船の周圍を數度迂回して、心中私かに「お目出度う！」を唱へ、其偉大な成功を祝福した。

それから再び大眞面目に昇騰の作業をやり始めた。余等は豫定の高度に達する迄倦まず撓まず努力したことは決して前回に劣らぬ。一時間の後は四千八百メートルに達し、次に四千九百メートルの表示を得た。其後間もなく余の自記氣壓計は五千メートルを示した。而して推進機は猶ほ止むことなく、相變らず猛烈なる唸聲を發して、急轉回を續けて居る。このときリンネコーゲル氏は神色自若として、機上に在

て、操縦を司り圓周を描いて進んだ。寒暖計は既に攝氏マイナス三十七度を示して居たが、余等は毫も寒氣の激烈なるに介意しなかつたが、唯空氣が稍や稀薄になつたと思つた。時に余の身體は少しく疲勞を感じて來て、呼吸が漸く迫り、肺臓は短かく急げしい皷動を始めた。身體四肢の動作がすべて重苦るしくなつて、余の後ろに着座せる教導者の方へ振り向かんとするにも、多大なる努力を要したのであつた。

兎角する中に天空は鮮やかに晴れ亘つて來た。密雲は何處へか消え去つて、我々の脚下には遙に伯林市並に其近郊の風景を明瞭に望んだのは誠に奇觀であつた。此の如き高空より瞰下すると、伯林と云ふ世界的の大都市でさへ、宛ながら掌の大さしかなかつた。それは一箇の黒點に過ぎなかつたが、それでも我々は明瞭にウンター、デン、リンデン街と之には連續せるシャロッテンブルガー、ショウセー通とを明かに指示する事が出來たのは愉快であつた。

余等は此驚嘆に値する光景に對して全く心魂を奪はれた。余は之に見惚れ恍然と

して長い間時計と自記氣壓計とを見るのを忘れて居たので、自分の職責を怠つたと氣付いて喫驚した。余が此ときより廿分前に氣壓計を注視したとき五千メートルの高所にあるのを知つたのであるから、今は既に豫定の目標に到達して居るに違ひない。所が氣壓計の示針は依然五千メートルにあつて動かない。余は之を見て大に失望した。其折リンネコーゲル氏は飛行場を捜索する樣に余に合圖をして、手で下の方を指した。否、之は余に取つては余りに痛ましい事であつたのだ。そこで余は憎々しげに拗り向いたが、リ氏がそれを見付けないから、余は彼の脛をしたゝか蹴ると、彼は此方を振向いた。其時に余は五本の指を擴げて彼の鼻先きに突き出した、そして左の手で上の方を指した。其時は「モット高く昇らなければならぬ、我々は今漸く五千メートルの所に居るのだ」といふのであつた。

リ氏は只微笑を洩すのみで、余の手を掴んで強く振つた、そして右手で二回五を示した。余は初め彼は輕く余の手を打つたのだなと思つた。但し此感はリ氏がモー

ターを止め、危險な空中滑走で（我々はポッダムの上空より垂直で下降したのである）一直線にヨハニスタール飛行場に驀進しつゝある時に一層強くなつたのである。

茲で私は飛行場を見出す爲めに見張をしなくてはならなかつた。

そして十六分後には我々は安全にルンブラー工場の前に著陸して、觀覽者の拍手喝采して歡喜に滿てる鯨波の中に立竦んで居たのであつた。

嗚呼余等は豫定の目標點に達したのである。世界の最高レコードは今五千五百メートルを以て全く破られたのである。

此飛行時間は全體で一時間四十五分に渉つた。今余等兩人は地上に群集する人々に圍繞せられた小柵中に昂然として立つて居た。昇騰したとき氣壓の觀測はリ氏の方が正しかつたのである。下降して調べて見ると、余の氣壓計は凍結して居たのを知つた。リ氏は飛行する前に氣壓計を前回よりも一層丁重に且つ温暖に保つやうに包んだから、今度は少しも狂はなかつたのである。

余は此の如く飛行機の操縱に沒頭して、肝膽を碎き研究を重ねて居ると、月日の經過は早いもので、余が祖國を離れなければならない時が來た。

青島戰の爲めに新たに建造した余の「鳩」は漸く其完成期に近づいて來た、そして此前途多望の飛行機が其解放條件を滿たした後、余は一種の極めて奇異な感情を抱いてそれに飛び込んだのである。當時余は之を世界中最も立派な飛行機だと思つた。

然も尙ほ余の功名心は是だけでは滿足しなかつた。余は極東に向つて出發する前に是非共一回は獨逸國に於て陸上横斷の大飛行を敢行しなければならぬと思つた。此理想を果さない内は自分の氣が濟まなかつた。

余は幸運にも此願望を達することを得た。余の理想はルンブラー氏の容るゝ所となつて、獨逸國内に數日間の巡遊飛行をする爲めに、同氏の所有する飛行機一臺を余に貸與して呉れた、余は早速野外に於て操縱者試驗を首尾能く濟まして、三月の

下旬、或る日の早朝七時には、余は充分に飛行の準備を整へたる余の「鳩」に坐乘したのであつた、其のとき余の前席には觀望者として余の親友なる陸軍大學のシトレーレ中尉が同乘して居た。

此人は當日初めて飛行機に乘つたのであるが、彼は終生此ときの飛行を忘れぬであらうと余は信ずる。

スタートは立派なものであつた。余は意氣颯爽として離陸し、空中に大圈を畫きながら進んで、終に五百メートルの高度に於て北方指して飛び去つたのである。其飛行振の結果を追想すると萬事好都合に行つた。ハーフエルゼーは忽ち横斷した、ナウエンが見へる樣になつた頃突然天空が薄暗くなり始めて、物の十分とは過ぎない中に危難がやつて來たのである。瞬時の間に漠々濛々たる濃霧が現はれ、我々を圍繞したのである。地上の物體はモウ少しも見えなくなつた。此障害は余の生來初めて施行する陸上横斷の飛行に對しては些と困難な試驗であつた。併し年若き飛行

家によくあり勝の樣に、余は平然として斯う考へた「勇氣さへあれば此困難に打勝つであらう。敢て驚くに及ばぬ。或は天帝が余の心膽を鍛錬する爲め此試驗を行はせるのだらう」余は斯う思ひつゝ從容として身をコンパスの方へ向けながら、濃霧の中を突破した。而して我々の目的地はハンブルクであつたのである。夫より二時間の後になつて、余は遂に三百メートルの高度の所で、遠く脚下に陸地の一片を發見して稍安堵の思をするとき、更に田畝相連れる美くしい耕地を認めたのであるが、其際余の感ぜる歡喜の情は到底筆紙の盡す所ではなかつた。余は恰も飛行場の上空に在る如く、奮然として滑走飛行を試み、矢庭に地上に滑り下り、間もなく無事に耕地の眞唯中に着陸した。すると俄に多數の人民が集まり來つて、其人達の口から此處はメクレンブルグの管區内であつて、ポツダムより多大の距離にあれば今日歸途に就くこと能はず、寧ろ此地に滯在しなければならない。其人達に斯くと聞いて却て非常に喜こんだのである。其日は丁度祭日であつたので、我々は此地の人々に

休日に相應はしい娯樂を提供したやうになつた。天氣が快晴になつたので、我々は更に飛行して見やうとした。が、柔らかな土質が車輪に喰ひ込み二進も三進も動かぬので、昇騰などは思ひもよらぬ事と思つた。幾多の見物人は歡喜と哄笑と、合圖と掛け聲とを連發し、限りなき皮肉な諧謔の言葉（それは彼等のするが儘に捨てゝ置いたのである）を余等に浴せ掛けた。親切な觀衆は耕地の外に我飛行機を曳いて呉れた。

又或る者は五六株の樹木を伐り倒し呉れたから、我飛行機は故障なく田畑を過ぎ更に溝渠を越え、漸く地盤の堅固な原野に出ることができた。

同所で余等は出發せんと思つたのであるが、彼等は余等に上等の珈琲と菓子とを侑め、只管歡待して、余等の腹を拵らへる迄はいつかな離さなかつたのである。

愈々出發の間際となつて彼我盛んに握手したり、萬歳の歡呼は叫び出されたり、或は帽やハンケチを打振つたりして送り呉れた後で、余等は再び上空に昇り、更に

北方の進路を辿つたのである。

余等心中の喜悦は少時の間しか續かなかつた。夫より十五分も過ぎた頃余等は又もや暗灰色の濃霧に閉されて眼前呎尺を辨ずることができない。而して二時間の後には此飛行が厭はしくなつて來た。忌々しいことには突如、モーターがブッ〳〵と息を吐き出したからである。時には三百廻轉も增したり、時には二百廻轉も減じたりした。

余はあらゆる機械裝置と通風辨とを檢査し、ベンジン油の貯藏が猛烈に減少して居るのを見て、慄然として恐れたのである。そこで出來るだけ飛行機を把握して、三百メートルの所で下に向け滑走した。

所が余は驚ろいた、霧が少し霽れて來たので、よく見ると如何だらう、余等は丁度アルスターの流れの眞上に居るのではないか。そしておまけにモーターは中止、高さは漸く三百メートルしかない。そしてフルスブキテルの飛行場は何處にあるの

か、更に見當がつかないのである。余の採るべき手段は唯一つ！沈着と決斷、此外にない。其時「市街を離れよ、一人たりとも無辜の人命を損つてはならぬ」といふ考へが余の頭腦を掠めた。余は一紙片に「我々には五分時中に着陸しなければならない、でないとモウ運轉材料はないのだし、彌陀佛になるんだ！」と書いて地上に在る見物人に示した。そこで彼等は地上を鋭意搜索して居たが、慌だしく喜び勇んで、余等の脚下にある墓地を其手で指示した。嗚呼無邪氣な人達だ！其人達は余等が果して如何なる狀態に在りしか、無論知らう筈がない。又彼の腕の動作が如何なる嘲笑を語つたのが、余等も其眞意を確知したのではない。

余等は其とき既に二百メートルほど下つて居た。モーターは不均等に震盪した。ベンジンの示針は十リートルを指して居た。併し余は猶平氣を裝ふて居た。このとき余等は都合よく市街を離れたのである。そして假令人騷ぎの劇しい庭園中に平滑に着陸することは出來ぬとしても、全く見知らぬ人を傷害することだけは免かれ得

るやうになつて。余は稍安心した。斯くの如き場合に於ては、一秒時でも極めて長いやうな感がして、千百の念慮が一時に恐ろしい速度で肝懷に往來するのであつた。此時我心を沈着に落付けないと、例へ如何なる英物でも殆んど浮ぶ瀨はないのである。彼是思案する中突如我助言者は兩手を振り動かして、前方を指示し始めた。余は今でも飛行鏡の中から其人を眺めて余を見詰めて居た照り輝く彼の兩眼がハッキリ見えるのである。

時に余等の前の方にはフルスブキテルの飛行船格納庫が霧の中を西天に沒する太陽の光に照られて、チラ〳〵と見えて居たのである。

ア、愉快だ！我々の目的地に達したのである。

余は斯く考へ心中の歡喜は迚も言葉に表はすことができない。ベンジンの最後の一リートルを以て、余は飛行場の廻りを一廻轉して私かに敬意を表した。そして急角度の嶮しい滑走飛行をした後で、輕妙に又確實に「鳩」を飛行場の敷地に著陸した

のである。

余は著陸すると初めは嬉しさの餘り感極まつて自ら觀望者シトレーン中尉の首に抱きつかんばかりであつた。我親しき友は余等の身が如何に危險な狀態にありしかを知らなかつた。後に彼は余の說明を聞いて非常に驚いて居た。余は今日でも——飛行といふ事が如何なるものであるかを充分に心得て居る今日でも——此最初の橫斷飛行の危險なりし事を思ひ、慄然として冷汗背を浹すを覺えるのである。損害の個所は直ちに分つた。瓦斯發生器の下部が破れて、ベンジンが其破損部から流れ出た。而して其裂開はモーターの震動に依り次第に擴大して居たのであつた。ベンジンが急速に減じたのも、モーターの動作が不均等であつたのも共に是が爲めであつた。斯くて何故に瓦斯發生器が火を發しなかつたらうか。此點だけは今でも不可能の謎である。

プレーメンで三日間親友と語り暮らした上で、遂に新瓦斯發生器がハンブルグに

到來した。そこで我々は更に北進せんとしたのである。

是より次の目的地はメクレンブルクのシヴエリンである。

或る暴風雨の凄まじい日の午後に、余は充分運轉材料を積み込んだ我飛行機に坐乘した。槓杆を曳くと機は全瓦斯の下に浮き飛んだのである。

今日では余は絕對的に必要を感ずるのでなければ、斯くの如き荒天の日には決して飛ばなかつたであらう。が、當時余は前後の思慮もあまりなかつたし、搗てゝ加へて青年飛行家の熱狂心に我身は捉はれたのである。嗚呼余は不幸中の幸を見ては長く待つては居られなかつた。重載したる飛行機は高くは昇らなかつた。疾風は丸で護謨球の樣に機體を彼此各處に投げつけた。余は之にも屈せず喜び勇んで廻轉せんとしたのであるが、それは高さが足りないので不可能であつた。兎角する中にハンブルグの市外に進んで來た。その市街の上を越えて飛び行くことはこのとき如何しても出來ることでなかつた。我機の高さは六十メートルで、脚下には小さな原野が

見えた。「余は直ちに斯う決心した。「瓦斯を出して着陸して見やう！」其瞬間に突風に煽られて、飛行機は墜落せん許に下の方に曳き摺られた。そこで余は「今だ、今大地にぶち當つて碎けるのだ。」と考へた。余は全瓦斯を排出し、衝突を輕減する爲めに上り舵を高く引きしめると同時に、俄に下の方に急轉を感じたが、機は恰も魔神が手を伸ばして飛行臺を犇と握つて放さない樣に、危く逆立をしたのであつた。

續いて我機に蒙つた襲擊は僅に一秒時にも足らない程の危難であつた。余は上り舵を引き裂き、瓦斯を取り去つたが、其時既に余は激烈な打擊を受けたのである。余は痙攣を感する如く、舵輪を握りしめて、頭を裝具にぶつつけて飛んだ。

我身の周圍は恰も死の如く靜寂であつた。

深き闇黑と恐るべき沈默とが四邊を鎖して居た。雨は霰を交へて礫の如く顏を打ち、風は刄の如く吹き荒むので、余は漸く我に歸つた。

此とき余は足を上に向け、胴體を壓縮し、顏を胸に推し着けた儘で、ヂットそこ

に倒れ伏す樣にして居たのである。其時余は微かに「俺は墜落したのだ、飛行機は何時燃出すかも知れぬ、そうすると俺は觀望者と共に命がないのだ！」と思つた。余は壓し潰された位置の儘で、點火槓杆を手探りして、漸く探し當て、火災の起らない樣にしたのであつた。其後で徐々に現實の意識に歸つて來て、余は我親しき友の身の上を案じたのである。彼は前方に坐乘して居たので、最初の衝突を抑制しなければならなかつたのだ、で、裝具が打擊に堪え得なかつた時には既に壓し潰されて居たに違ひない。前方には何も動く氣色がないので、余は低い聲で（余は殆んど空氣の吸へない程に壓し潰されて居たのである）問うて見た「シトレーレ君、生きて居るかね」

何の返事もない、折柄心苦るしい靜寂があるばかりである。

再び問うて見て漸く答へがあつた「ウン、一體全體ドヴしたのだえ？馬鹿に暗いぢやないか、何か變つた事が起つたに違ひない。」

吁！余の嬉しさは如何であつたらう。余は喜びの余り、眞向から斯う叫んだ。「オイ、シトレーレ君！君はまだ生きて居るのだね！それは有り難い。君の筋骨は大丈夫かねえ！」親切な彼の長身は狹い塲所で慘ましく壓し潰されて居た。そして余は彼が「ウン、どうだか知らぬ、それは後になれば分るだらうと思ふがね」と言ふのを聞いた。

それから風雨が再び靜かになつた。ベンジンは百七十リートル詰めてある油槽から小河をなして流れ出て居た。暫らくすると（之が余には極めて長い時間と思はれたのだが）誰かゞ外の方でコツ〳〵と敲く音がして、遠方から其聲が聞えて來た。

「もし、誰れかまだ中で生きておゐでゞすか」

「居るよ、急いで呉れ、でないと僕等は中に居る斯うして窒息して了ふ！」と余は叫んだ。

そこで機體が扛起された。余は鍬で堀り出されつゝあるのを知つたが、驟て新鮮

な空氣が我々の顏に觸れた。

「待て、待て、他の所から空氣を入れて呉れ。君等は余の腕を打つちまう！」とシトレーン君が叫んだ。

救助人共は更に他の側から堀り出した、そして到頭余の居る塲所は汚穢な瓦斯を拂はれたのであつた。その上で余は不思議な臭氣のする温床の上に自由に氣持よく横になつて居た。そこへ又例の長身のシトレーレ君も這ひ込んで來た、そして余は是迄澤山の人と握手したけれども、今此篤實な同乘者に對してなした程に愉快な握手を行つたことはなかつた。

ハテ何といふ事だらう！隨分な醜態だ。飛行機は全然顚覆して、約一メートルばかりも柔らかな堆積肥料の中へはまり込んで居たのである。機體は三箇處折れ碎けて、翼は破壞し僅かに其骨と亞麻布（カンバス）と針金とが四邊に亂れて居るのに過ぎなかつた。然も此の如く墜落しても、二人の人間が無難に助命し、又仕合善くも糞溜の中よ

り這ひ出たのである。

シトレーレ中尉は僅かに脊柱骨を少し挫いたばかり、余は肋骨を二本折つたのみで濟んだ。人間の怪我はそれだけであつた。余は終生決して糞溜に對して惡口はすまい。願はくは糞汁と其子孫との永久に繁榮ならん事を！

余等は悲嘆に滿ち、稍や跛行しながら、其後の袂別旅行は鐵路で行つたのである。

然しながら余の希望は蘇て日光に輝き、色彩に充ち、更に熟氣に培はれ、祝福に滿ち、更に更に花實、そは未だ他人の聞知せざる美と豐富とを有する世にも不思議なる花實を著くる日は來たのである。

斯くて余の更に盡すべき義務は現はれ來たのである、余の旅行は是より始まつたのである。

二　青島に於ける光輝ある日時

西比利亞の平原と荒野との中を鐵路にて、幾晝夜となく走り續けた余は新任地即ち極東に向ひつゝあるのだ。

長途旅行の後は遂に奉天に到着。夫から北京も間もなく通過して、漸く濟南府に着いた。支那に來てから初めて獨逸の語音が耳に響いたのである、それから庭園と耕地と花畑とに滿ちて、婉麗に裝飾されたる平野の中を十時間の鐵道旅行をして、余を載せた汽車は終に青島の中央停車場に徐行しつゝ辿り着いた。

今や余は六年目で再び青島の山河を見たのである。

かくて余は再び獨逸の租借地、即ち極東に於ける獨逸一都市に來たのである。

停車場へは余の同僚が迎へに來て呉れた。其案内で速力の早い馬車に乘り、小さ

な蒙古種の驛馬に曳かれて新らしき假寓へと着いたのである。

先づイルチスブラッツに來たのだが、之は青島の競馬場であり、又同時に今後余の飛行場たるべき所であつた。當日此處は祭日の裝飾を凝して居て 青島の住民は全部集合して居た。廣い芝生の眞中には數千の觀覽者が環列を作つて、フートボールの競技場を取り圍んで居る。丁度今日は祭日であつて、フートボールの大競技が獨逸の水兵と英國の旗艦「グウド、ホープ」の水兵との間に行はれて居たのである。

此頃「グウドホープ」は青島に巡航して來たのである。「フートボール」の競技は甚だ立派なもので、勝負の結果は一對一であつた。

眞當時誰が思ひ付いたものがあらうか！夫より正に六ヶ月の後には此とき兩側に立つて勝負を爭つた同じ敵手は實に干戈を執つて相對したのであつた、然も後日の勝負は命がけの恐ろしい競技であつて、勝つか死ぬるかの破目であつたのである。それは智利「コロネル」沖の海戰であつた、獨逸の水兵は二十七分間に英國の旗艦

「グウドホープ」を太平洋の奈落の底に沈めたのである。

今日はまだ何人も此の如き大戰爭の起らうとは夢にも思ひ付かなかつたので、人々の心は歡樂に充ち滿ち、交際が最も親密に行はれ、獨逸の水兵は英國の珍客をば自家にまで伴ひ歡待を厚くしたのである。英國の小艦隊は青島に碇泊すること二日の後、別を告げ港口を出でた。其遠征を送る爲め、之に續いて獨逸の巡洋艦隊も海軍中將スペエ伯の指揮の下に出港したのであつた。

兩艦が先づ港内を出ると、信號旗は高く檣頭に掲げられて「左樣なら、御機嫌よろしく」といふ意味の兩國艦隊指揮官の信號を傳へた。

嗚呼兩艦の將士が此ときに六ヶ月の後、コロネル沖であんな事が起らうとは豫想せぬであらう。

余が青島に到着して、任務上の屆出を終ると間もなく、自分の飛行機の事を尋ねて見た。そして明日にも余の大飛行機を引き出して、青島の人士を驚ろかしてやり

だいと思つた。だが大變、余は又數週間待つても可いのであつた。といふのは余の飛行機は今尚ほ印度洋あたりに漂浪して居て、其汽船は漸く七月になつて到着すると云ふことであると聞て、余は頗る失望した。

余は「ぢや急ぐ事はないのだつた」と心の中に呟やいた。余はそれで青島の市中市外を彼方此方遊覽したり、住宅を探したりして、充分餘裕のある時間を持ち厭んだ。其時飛行場の近傍に愉快な小別莊が丁度空屋になつて居たので、極めて敏捷に此家を借り入れた。そして余は新同僚バッチヒと此住宅に引越したのである。

此別莊には自分の身を樂しく暮すだけのものは殆んど皆備はつて居た。彼の美くしい鎭守府、海軍の陸上官衙を見よ、余は今青島といふ現世の樂園に居るのである。余が義勇奉公の任務は固より飛行術である。开は余の欲する最も愉快な活動振ではないか。それからイルチスブラッツや遠く濃紫の海を見下す美くしい丘陵の上に立つ此可愛らしき別莊。加之余は嘗て本國に在るとき、騎馬部隊に屬して居て、三年

間立派にやつてたのである。余の如く幸福で且つ滿足せる人が世にあらうか。今や余は住宅の室内整頓に著手した。余は「美術」雜誌の住宅調へ方の圖を澤山に所持して居たので、それを提げて支那人の指物師の所を訪ね、その通りに室内裝置を注文した。實に驚ろいたのは、支那人は何でも模造することが不思議に巧妙で、然も仕事が馬鹿に早くて非常な廉價である。四週間の後になつて漸くあらゆる荷物が到着したので、家具類を適當の所に配置した。我家屋は上から下まで光り輝やいて居た。そこで我々ホヤ〳〵の「別莊居住者」は意氣揚々として心嬉しく此新宅に轉居したが、屋内に慰安の設備は何一つ缺くるものはなかつた。邸宅内外の掃除其他に必要な使用人も亦手に入つた。一體極東在住の歐洲人は身分の體面を保つ爲めに、數名の奴僕を蓄へねばならぬ、此の如き慣例は言はゞ支那人に對する我々歐洲人の道德的義務であるのだ。

立派な青色の絹物を纏うて居る料理人のモリッ、いつも反齒を剝き出しては居る

が、それだけに又馬には能く注意して呉れる馬丁のフリッ、大の怠惰者の圖丁マックス、それから横着な年少の男童と、これだけが我々の小厠團を形成して居たのである。

其外にドルシュ君とジモン君とが居た。

此兩君は我々の從卒であつて、我々歐洲人は支那人の面前では、肉體を露はすやうな勞働をしてはいけないといふ、習慣を正直に實行して呉れたのである。

我住家の周圍には大きな庭があつて、其側に建てられた馬車小屋附の厩と自動車小屋と支那人の住家とがあつた。其中で最も重きを置いたのは余の鷄小屋であつた。余の着後二日すると、余は巣籠りの牝鷄を一羽買つて卵を十二個抱かせてやつたが、我々が引越して來た時は既に七羽の雛が生れて居た。

鳥類は支那では安價だ。鷄が一羽五錢、鴨又は鵞鳥が五十錢で、余は間もなく五十羽ばかりの家禽飼養場を邸内に設けたのであつた。

そうだ、其際余は「騎士」になつたのである。即ち馬を一頭調達した。同僚の一人が小さな可愛い狐馬を持つて居たが、余との間に値段が折合つたので、間もなく「フイップス」は余の廐に來た。此「フイップス」は可愛い善い乘馬であつて、且つ狩獵にもポーロ遊び（馬上打毬戯）にも申分はなかつた。併し余が曳き出さうとする時には、よく拳固を喰つたものである。攻圍の時には、包圍戰の始まる前日余が前面地に乘り出して居ると、此野郎自分の主人を捨置て、逃げたのである。鐵筩彈が彼の近くに爆發すると、奴さん自分の主人を捨置て、敵の方へ疾走して行つたのである。

極東に於ける歐洲人の生活は實に單調である。社交は至て少なく、善い芝居は見られず、音樂も聞けず、我々があつて欲しいと思ふものは一つもない。我々の身に取て唯一の休養となり慰藉となるのは、内地に於いて我々の地位にあるよりも暮し向きが幾分か宜しいのと、乘馬のスポートである。青島では馬術が特に盛んであつ

た。

余はボーロ乘りには熱狂して居た、そして余の馬は珍らしい横搖れの動作や、引つ爬く動作に幾分慣れてからは、すべて愉快に行つた。

七月中旬になつて余の憧れて待ち詫びた飛行機が到着して、余の煩悶は靜められた。「あの」汽船が安着して、飛行機を齎らして呉れたのだ。埠頭に巨大な箱が現はれると思ふ頃には、最早余は人夫を連れて其處に行つて居た、そして本來空氣と日光との中を飛行する爲めに生れた大鳥を、それが數ケ月の間幽閉せられて居た暗い牢獄から取り出したのである。箱が餘りに重かつたので、飛行機は其場で包裝を解いた。口を開いて眺めて居る支那人の中に歎聲が起つた。全部の包みを解くと、彼等まで威風堂々と隊伍を整へた。最初に兩飛行機、次に機翼を載せた車三臺、其次に附屬品を積んだ車が二臺進んだ。馬が是等のものを牽いて、我々は意氣軒昂として青島の市街を練り歩いて凱歌を擧げながら、イルチスブラッツの格納庫に辿り着

いたのである。

それからは余の身は少しの安樂をも得られなかつた。我々は晝夜兼行の作業で組立てや機翼の張り方に努力し、二日後には極めて早朝まだ何人も知らない中に余の飛行機は出發點に停つて居た、そして太陽が上ると余は全瓦斯を加へて不思議に澄み渡つた海氣の中に矢を放てる如く進んだのである。

余は青島に於ける最初の飛行振を決して忘るゝことができない。飛行場は格外に狹小で長さ僅かに六百メートル幅二百メートル、加之種々の妨害が澤山あつて、周圍は丘や岩で取り卷かれて居たのである。此飛行場が如何に小さく、爲めに離陸着陸に當り如何に甚だしく困難であつたかは余の間もなく仔細に經驗した處である。以前オーストリアの飛行將校であつた余の友人クロプカー（今は「カイゼリン、エリザベート」艦乘組である）が嘗て余に言つたことがある。「此處が飛行場だつて言ふのか。最負目に見ても子供の遊戯場に過ぎないではないか。余は今日迄コンな場

所で飛べるとは嘗て思つた事もない。」余にしても同樣であつた。獨逸であつたならコンな小さな場所は高々止むを得ざる着陸場として求むる位のことであらう。

併し何と言ても詮方ないのである。是が租借地全部に於ける唯一の飛行場であつて、其他の所はすべて深き峽谷の交錯せる荒凉たる山脈である。だが、此日光の麗らかな朝にはそんな事は一切介意して居らなかつた、そして愉快に飛び廻つて青島の上空を旋回したのである。推進機の響は朝靄の中に轟きて夢暖かな青島人を驚かし、其眠を覺ましたのである、併し余が着陸しやうとすると少々可笑しくなつて來た。驚ろいた、着陸場は甚だしく狹隘であつた。それで心ならずも余はいつまでも圈を畫きながら廻轉して、逼迫せる着陸の危機を延ばして居たのであつた。

併し永しへに上空に在る事は素より不可能である。で、終に余は急突を一回加へ、瓦斯を取り去り、一瞬時の後には瑕瑾のない指定地着陸をして飛行場に下つたのである。是で余は著陸の作業に確に熟練した。そして其日の午前中は殆んど飛行機か

横著な年少のアウグスト

ら出なかつたのである。

所が又他の仕事が增加した。第二の飛行機。(之も亦ルンプラー鳩であつた)は海軍大隊に在る余の同僚ミュラー、スコウスキー中尉が飛行する事になつて居たのだが、之を組み立て機翼を張らなければならなかつたのだ。二日の後乃ち千九百十四年七月三十一日の午後に其飛行機は全部出來上つた。

ミュラースコウスキー君は其の飛行機に坐乘した、そして彼は余の此飛行場で得た種々の經驗を聞いた後で全量の瓦斯を加へて浮んで行つた。

されど此男には幸運が向いて居なかつた。

彼の飛行機が數秒時も空中にあつて、危險な個所(之は飛行場の終端であり同時に土地の終端であつて、そこから嶮しい巖石になつて海に落ち込んで居るのである)の上空約五十メートルの所に達すると見るまに、機は突然一方に傾いた、そして我々が冷汗を流して恐惶の中に見て居ると、機は機首を前にして疾風の如き響を立て

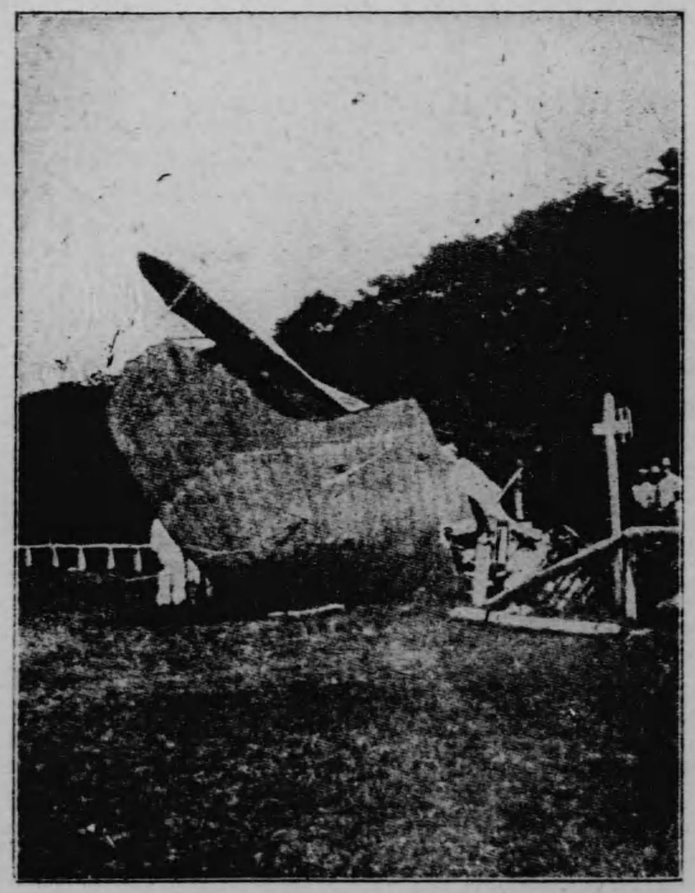
ながら巖石の間に墜落したのである。

我々は出來るだけ急速に墜落の場所に駈け付けた。彼は見るも誠に悲慘な狀態になつて居た。其飛行機は全然粉碎され、其破片の中にスコウスキー中尉は斃れて居た。我々は重傷せる彼を衛戍病院に運んだが、彼は攻圍戰の終りを告ぐるまで退院が出來なかつた。だから其飛行機はすべて廢棄して了つた。

兎角せる中に青島にも色々の事が起つた。美くしく艶やかな七月——不思議に麗らかな日光と碧空の輝ける七月——がやつて來た。此季節は年中に於て最も美くしい青島の盛裝せる頃である。

海水浴の流行が今や最も盛な時となつた。支那及日本に於ける居留地から澤山の歐米人取り分け婦人連が流れ込んで來て、青島の美はしい山光海色を見て樂しみ、「極東のオステンド」に於て海水浴の快興を味はうとするのである。

其頃の氣分と言つたら、誠に愉快なものであつた。自動車や騎馬での遠足、馬上打



青島に於ける最初の墜落飛行機

巷歳、テニス等で勤務中の餘暇を過ごし、殊に夕方の社交的會合には舞踏が思ふ樣に行はれて誠に嬉しかつた。

以前と同樣に矢張り英國婦人が來遊者中には一番多數であつて、間もなく華美な交際も成立した。

八月の初めにポーロー競技が催ほされる筈で、それには我々は對競技者として上海の英國人のポーロー倶樂部員を招待したのであつた。

時に七月三十日晴天の霹靂の如く「戰鬪部署に就け」の命令が青島に下つたのである。

三　戰爭の警報と余の鳩

余は尙ほ今日の出來事の樣に記憶して居る。

早朝職務命令が我々の別莊に達して、バッチヒと余とは即刻所屬部隊指揮官の所へ出頭せよとの命令に接した、掩護が命ぜられたとの事であつた。我々は勿論それは單に敎練に過ぎないものと思つて、朝の休息を妨げらるゝ不平を鳴らしつゝ命せられた場所に行つた。此處で我々は殆んど信じ難き通告の確證を得たのである。然も內心には開戰があるだらうかと疑ひながら、我々は自分の配置された場所に急行して必要な活動を開始した。

其翌日に「開戰の危險迫る！」といふ電報が到着したので、開戰の通告は愈々確實になつた。

それから八月一日に動員令が下つた。八月二日には露國に對し宣戰、三日には佛國に對して宣戰が布告された。

是等の日に起つた事件や感想は迚も拙筆では述べ盡せない。

讀者諸君は下記の樣に想像すれば宜い。此處に獨逸の殖民地、獨逸の城砦があつて、青島住民の大部分は將校であり兵卒であつた。然も其人種から言へば、青島は國際的になつて居た。乃ち露國人、佛國人、英國人が我々を圍繞しつゝ滯在して居たのである。それで意見と感情とが常に衝突し合つて、實に世界中其他の場所に於ては殆んど見られぬ奇觀を呈して居た。

青島に到着してから、我々は次の如き疑問に對し日夜頭腦を惱まして居た。开は「英國人と戰爭するか」と云ふ疑問であつた。

此疑問の意味は唯極東に生活した人にして始めて理解し得ることである。

八月二日に獨逸の英國に對する提議が發表せられた、同日余は一英國婦人と乘馬

で散歩して居たが、無論談話の中心となつたのは此問題であつた。此婦人の見解は其友人（男女とも）のそれとよく一致して居たが、即ち英獨間の戰爭なんて考へられない事だ、でないと特に極東に於ては白人種の權力が全然失墜して了つて、黄色の日本人が我々との爭鬪から生ずる果實を微笑しながら收拾することが出來ると言ふのであつた。

我々獨逸人も亦此考へ一つに頭を痛めて居たのは勿論で、殊に我等海軍將校にありては此疑問ばかりが日常の談柄であつた。最初の動員令の發布前は此談話で持切つた一層險惡な風評が我身を取卷いた。所が八月四日に、

「英國に對し宣戰の布告があつた！」

といふ電報を受けると、我々はすべて此緊張狀態から左樣な感じがした。

今や斯くして歐洲には戰亂の骰子が投げられたのである。

我々のすべてが甚だ幸福に感じたとは余は主張し得ないのである。否、事實は其

反對であつた。我々は繰り返し〳〵斯う言つたのである。「今我々は本國を遠く距れる此青島の地に滯留して居るが、祖國には我々の血族や我々の同僚が居る。多幸多福なる彼等は動員の日を豫知し得るのである、彼等は世界を敵として出征し得るのである、彼等は我々の常に愛慕する神聖な祖國や妻子眷族を保護する事が出來るのである、而して我々不仕合のものは此遠隔な孤城に屯在して何等の援助をもなし得ないのである！」我々は斯う歎息しつゝ互に語り合つた。

昨今本國では如何なる狀態であらうといふ事を考へるだけでも、我々は甚だしく憂慮の情に堪へなかつたのである。此極東の地に於て英國人、露國人、及佛國人の數は遙かに我々獨逸人に優るけれども、彼等が此地に於て我々を攻擊する勇氣のないといふのは我々が能く承知して居たのである。

然も我々は常に斯う思つて居た。「でも彼等は或はやつて來るかも知れぬ！」といふ萬一の杞憂を抱いて居た。

吁！そのとき我等はどんな態度で彼等を迎へるであらう！斯うなつては最早日本の事など無論何人も考へては居なかつたのであつた！

動員令實施の日に我々は多忙の中にも我等の客人を忘れはしなかつた。成る程彼等は皆我等の敵である。けれども然も彼等は我等の客人として我家に留まつて寢食を共にしたのである。

彼等の間にも過激の言動のあつた事は推察するに難くない。殊に英國殖民地に於て英國人が獨逸人を殘酷に取扱つたと云ふ報告は既に我々の手許に屆いて居たのだから。

このとき外國人と我々との交通が斷絶したのは言ふ迄もないが、又（此點は茲に特に英國人に對して特筆して置きたい）敵國の多數の臣民が、我々「野蠻人」に於てのみ見らるゝ樣な尊敬の念を以て遇せられた事も勿論である。

外國人に對しては、任意に今後も青島に滯在するとも、或は他鄕に去るともそれ

は各自勝手であつて何等强制的命令を加へない。それからすべて外國人が此獨逸殖民地を引き拂はねばならぬ場合には政府は早速通告するといふ事とを公告したのである。但し何人たりとも此市街區域を去らざること、又何人も今後は城砦に近づかず、或は間諜らしき擧動をなさゞる事だけは各自に於て注意して吳れる樣に要求せられたのである。かくて吾人は香港其他の英領殖民地に於て、吾人の從兄弟即ち英國人の一擧一動を注意して居たのである。

然るに英人の非行を目睹し實驗した人は此點に關して正に數卷の書冊を著すことが出來る程澤山の材料を蒐集したのである。

歐洲戰亂勃發以來我々に取りて唯一の慰藉となつたのは、日々祖國から來る無線電信の通信を受けて居た事である。

其通信の來る毎に我々の心に感じた祝福と喜悅の情とは到底他國民の想像し難いものであつた。毎日電報は大抵夕方に來た。我々海軍將校は小さな倶樂部に集合し

て、言ふ迄もなく戰爭の話ばかりして居たのだが、壯快な戰報が來ると、我々の拍手喝采する音は殆んど何物にも比することができなかつたのである。然も我等は其際全く限りなき悲哀を感じたのであつた。といふのは「我々は其戰場に居る事が出來ない！」からである。

其中八月十五日になつて、吾人は一讀再讀しながらも其眞僞を疑つた程、奇怪極まる電報を手にしたのである。

其告示文は左記の通であつた。

號　外

「帝國政府は現下の狀勢に於て極東の平和を紊亂すべき源泉を除去し、日英同盟協約の豫期せる全般の利益を防護するの措置を講ずるのは該協約の目的とする東亞の平和を永遠に確保する爲め極めて緊要の事たるを思ひ、玆に誠意を以て獨逸帝國政府に勸告するに同政府に於て、左記二項を實行せられんことを以てす。

第一　日本及支那海方面より獨逸國艦艇の即時に退去すること。退去する能はざるものは、直に其武裝を解除すること。

第二　獨逸帝國政府は膠州灣租借地全部を支那國に還附するの目的を以て、一千九百十四年九月十五日を限り、無償無條件にて日本帝國官憲に交附すること。

日本帝國政府に於て叙上の勸告に對し、一千九百十四年八月二十三日正午迄に無條件に應諾の旨、獨逸帝國政府よりの回答を受領せざるに於ては、帝國政府は其必要と認むる行動を執るべきことを聲明す。

其下に我總督は下の如く附記した。

「吾人が此青島を戰はずして日本に提供する事に一致する能はざるは勿論である。日本の要求の全然邪曲なるに徵して見ても、吾人は如何なる回答の來る可かは豫言するに難くない。換言すれば回答期日の滿了すると同時に吾人は戰端を開かざるべからざるを意味する、而して此鬪爭は勿論最後の一滴に至る迄の戰鬪なるのである。

さて事態が極めて重大であるから、婦人小兒の轉住の如きも、一瞬時を猶豫すべきにあらず、夫故に我總督府は本日即ち金曜日の午前に大約六百人を收容し得べき一汽船を天津に向け出港する筈である。此塲合山東鐵道の列車も亦平常よりも遠く交通すべきに依り此地に留まるを欲せざる人はすべて之を利用せられ度い。本職は特に之を勸告するのである」

「青島は今開戰準備をなすのであるー」

かくて我々は我々の立塲が如何なるものであるかを知つたのである。

此戰爭の種類及困難に關し、且つ其結果の見込に關しては我々は毫も疑を挾まなかつた。併し此時ほど愉快に又倦まず撓まず活動した事はないのである。此一週間には何人も鬼神の如く努力した。而して上は最年長の將校から下は最年少たる十五才の自働車運轉手（戰時志願者）に至るまで、各自其精力と勇氣と愛國心との全部を捧げて、青島の防備を完成することに奮勵した。

是より先き余の身體は意外な不幸に際會したのであつた。ミュラー、スコウスキー君が墜落してから三日目に余は極めて麗らかな日光を浴びながら、余の最初の偵察大飛行を企て、租借地の全地域及び其外方數百キロメートル迄を充分に見盡した後青島に歸つて來た。

其とき余は千五百メートルの高度に在つたのだが、氣流の關係から着陸することが非常に困難であつた。飛行塲の上空大約百メートルの所で、今一度全瓦斯を加へて最後の旋回をなし、それから風に向つて着陸せんとした時に、モーターが一秒時許烈しく回轉した揚句、その瞬間にブツ〳〵と息を吐き始めて、遂に用をなさなくなつた。余は一寸其機械を檢視すると、飛行塲に着陸することは全く思ひもよらぬ程狂つて居た。

さればと云つて、右へも左へも旋回は全く不可能である。其とき右方には例のボーロー倶樂部の建物と深い峽谷とがあり、左方には海岸ホテルと別莊とが連なつて

居たのだ。

最早や何等施すべき策がないと、余は覺悟の臍を固めて居た。そして唯「モーターを損せぬ樣に」といふ一事だけを一心に考へた。

すると眼前に小さな森が現はれたので、其上に機を乘し上げやうと思つた。余は上り舵を引いたが、機體は丸で太丸太の樣に熱い稀薄な空氣の中にはまり込んだ。頭が丁度電線にぶち當らんとしたから、余は膝を引き緊めて心ならずも足を前方に支持したが、强力な打擊を加へたので、余の身邊には異樣な音響が聞え、したゝか頭と膝とをベンジン槽にぶつつけたので、暫時意識を失つた。

間もなく氣が附いて見ると、自分の身體は無難息災であつたので周圍を見廻はすと、余の「鳩」は鼻を町の下水槽にぶち込み、尾を高く空中に擴げて居た、そして翼と飛行臺とは屈曲或は挫折せる支柱と破壞切斷せる亞麻布と針金との堆積した中に挾まつて居た。

無慘のことに！余の「鳩」は動員令實施の第三日目に此の如く余を窮地に陷しいれたのである。余は何とも名狀すべからざる絶望の淵に沈んだ。併し余は全然意氣銷沈はしないで、自ら其破片を格納庫に運んだ。幸に余は豫備の推進機と翼とを祖國から豫て持參して居たのである。

願はくはモーターだけでも無難であつて欲しかつた。モーターの代品は持つて居ない。そして又如何に努力したとて、此地でモーターの調達は到底覺束ないのであつた。

余は希望に滿ちて豫備の大箱の所に行つた、そして先づ翼の入れてある箱を開けた所。が、驚いた！不快な濕ぽい惡臭が余の鼻を打つたので、何か不幸を豫期しながら我々は內側の亞鉛の被覆を開いて見た。

眼前の光景は人をして愕然たらしむるものがあつた。箱の中には唯だ〳〵徵に汚れた古道具があるばかりである。翼の張りは悉く朽廢して居たのである。個々の肋

木や張り木や丸太は以前は膠着して、立派に包んであつたのだが、今は甚だ錯雜して居り、厚い黴の被層に蔽はれて居たのである。噫是は何たる悲慘な光景であらう。

次に推進機の箱を開いて見た。其箱の中も前と同樣の狀態を呈して居た。一緒に持つて來た五個の豫備推進機は悉く無効に歸したものと、二度と使用に堪へない程に歪曲して居るものとである。本國では推進機が四乃至五ミリメートル以上も尖端が損じて居る場合には、誰れもそれを用ひて其儘で飛ばうとするものはないのである。余の推進機は二十センチメートルまでも損じて居たのだ。さて果して如何したら宜いか、余の頭腦に別に良い方法も浮ばないのであつた。

然しながら余は些とも落膽することなく、優秀なる組立人スチューベン（機械監督人海軍下士）と共に修理工事に取り掛つた、そして其日の午後に余はスチューベンと余の部下の機關兵フリンクス及ショールの二人と尙外に造船所の木工部の支那人八名と力を併せて仕事に着手し、黴で朽廢した翼を再び組み合はしたのである。

そこで余は歪曲の最も少ない推進機を造船所に携へて行つた、そこでは上手な模型を造る木工が余の危急を救ふて、其指導の下に支那人を督して新らしい推進機を造つて呉れたのである。

其手際は誠に立派なものであつた。

讀者諸君は左記の樣に想像すれば可い。

先づ七個の樫の厚板を普通の指物師の用ふる膠で膠着さした。それから二人の支那人が模型工の造つた型に從つて手斧を揮ひ、漸く右の結合した厚板から申し分のない推進機を拵らへたのである。此仕事は人力で出來上つたのであつたが、支那人にして初めて出來るといふ程に精密に且つ注意が行き屆いて居た。

此推進機で余は青島攻圍戰中の飛行を悉く遂行したのである。

格納庫内に於ても我々は決して無聊を感ずることはなかつた。我々は非常な精神の緊張を覺え晝夜とも一生懸命に働らいた。そして余の墜落後、第九日目には早朝

日出時に於て既に余の「鳩」は試驗飛行をなすべく出發點に停まつて居たのである。

余は此飛行を眼前に控えて、頗る悲觀して居つたのは勿論無理からぬ事であつた。

余の飛行機の翼は徹て朽廢したる材料を再び造り直したものであつた。开は全部歪んだのを出來るだけ平たく直し麻布をよく張らなければならなかつた。推進機は前に述べた樣にして出來たもので、百回以上も回轉が足りなかつたのである。其上に飛行場の有樣が極めて不適當且つ飛行するのに甚だ困難であつたので、スタートする毎に直ちに成功するか、さもなくば美事に墜落するか、二つに一つは間違なく起つたのである。

余は斯くの如き事を考へては居られなかつた。嗚呼今日は戰爭である、余は今唯一人の飛行家である、任務はどうしても果たさなければならなかつた。かくて余は幸運を贏ち得たのである。

何んでも省略し得べきものは、輕減の目的から飛行機より取り除いた、飛行機は

最初稍や不本意らしい樣子で余の拳に服從して居たが、しばらくすると遂に空中に上つた、そして間もなく余は其操縱を自由にするを得たのである。それから再び旋回の運動をして、意氣軒昂總督の官邸前に「飛行機再び完全」といふ報告を投じたのである。

夫から余は偵察大飛行を始めた。先づ我租借地の全地域を巡視し、夫より更に數百キロメートルの遠きに至るまで、郊野の上を飛翔し、進軍道路を監視した。そして余は荒涼として凸凹多き海岸線を巡察して、敵軍が接近しはしないか或は上陸しはしないかと遠近を見張つた。

此飛行は余の是迄の飛行中最も美くしいものゝ一であつた。

大氣は極めて清澄であり、蒼空は至極美くしかつた。そして太陽は壯快なる天地の間に、荒く刻める峽谷と高山とを連照し、すべてのものの輪廓を濃綠色に染め、海の上には絢爛たる慈光を浴せた。このとき余は此上なく精神の恍惚たるを覺え、

數時間氣高き感念に打たれ、胸の中に湧き返る歡喜の情と自然美に憧るゝ汎愛の力を擧げて、心行くばかり樂しんだのである。

併し其際余の胸に心配がなかつたのではない。第二回の偵察飛行を終ると、既に推進機の膠着した處が裂け出したのであつた、そして推進機が離れ〳〵にならなかつたのは實に奇妙であつた。そこで余は亦之を解き脱して再び膠着しなければならなかつた。此始末は其後飛行する毎に必ず繰り返されたのである。余が天空から歸つて來ると、直ちに推進機を取り外づし、自働車で造船所に駈けつけ、速かにそれを膠着し、壓搾器で螺旋を締めつけ、そして夕方遲く再びそれを取りに行つて準備を終り、其翌朝はそれで又飛翔を試みることを例としたのである。

所がいつも〳〵推進機に龜裂を生するので、余は其入口の角を全部麻布の材料と即効紙とで貼りつけた。すると少くとも此角は幾分か長く持續したのであつた。

青島で余は別に第二の任務を果さなければならなかつた、飛行機の操縱に從事す

る余は亦繫留氣球場の指揮者であつたのである。

余は青島に向け本國を出發する前に、伯林で飛行船の課程を修了して居たが、之は自由氣球の飛行及繫留氣球の實習と外に氣球補布とを含んだものであつた。

今般青島に新設された繫留氣球場は二個の各千立方メートルの大氣球と、一個の氣球囊と瓦斯の製造に要する附屬品と、氣球使用上の附屬品一切とを備へて居た。

其取扱に當るものは少時日の間飛行船の教育を受けた事のある海軍下士一名と余とである。此兩人が輕氣球に就き多少の理解を有する肝要の人々であつた。我々は此新設の準備を全部整へた後で、極めて細心の注意を加へて氣球の膨脹に着手した。そして最初黄色の大氣球が肥大に脹れ、地上に緊と繫留された時に、我々は非常に愉快を感じたのであつた。それから余は右の下士と協力して、手づから一本〳〵の線を結び合はした。すると間もなく此黄色の怪物は緩やかに彼方此方に搖れながら

天空の中に懸つたのであつた。そこで再びそれを取り下して、余は最初上昇をなすべく單獨に身を躍らして籃に攀ぢ登つた。此上昇の折に余は危く獨逸國に向け奇怪至極な旅行を始めんばかりになつたのである、といふのは「放せ！」と命令があつた時に、過つて控へ綱が充分に緩んで居たので、一回強く躍進して氣球は垂直に約五十メートルばかり空中に飛び上り、そして力強く控へ綱に急突したのである。其時余は「今氣球が離れるのだ！」といふ考が浮んだ。烈しい一打擊を蒙つて、余は危うく籃から投げ出されんとしたが、幸に全線索が最も新らしかつたので、無事に持ち堪へたのであつた、そして余は之が爲め一教訓を增した譯である。其後は余の乘組員に組織立つた教養や實地の練習を與へるので、間もなく此處は恰も我々が少年時代に飛行船員でゞもあつたかの樣に活躍したのであつた。

當時總督府の人々は繫留氣球に極めて多大の望を寄せて居たのであつた。かくて一般の將校達は、進軍し來る敵を觀測する塲合、若くは又敵の砲臺を觀測する如き

塲合には是非共天空より望見する必要があるから氣球に信頼して居た。然るに悲しい哉是等の希望は一も達せられなかつた。そして余が氣球塲の利益如何に關し、竊に抱いて居た杞憂がすべて事實として現はれたのであつた。

余は此氣球を千二百メートルまでも上らしめたに拘らず、之に依りて我々の城砦の前面に於ける山脈の後方を望見する能はず。かくして敵軍の行動、就中敵の攻城重砲兵隊の陣地を觀測することは出來なかつたのである。

併し是は青島の防禦上根本的に至難の事であつたのだ。

此一事竝に我々を圍繞する苦難の幾分なりとも我讀者諸君に知らしむる爲め、余は次に一言しなければならぬ。

膠州灣の防備區地帶は延長せる岬の上に在りて、其南西の突端に青島市は在るのである。其三方はすべて海に圍繞せられて、市街は北東面に於てモルトケ山、ビスマーク山、及イルチス山（是等が海から海へ及んで居る）の半圓形の小丘陵に依り

て緑取られて居るのである。此山峰の中央に我々の主要堡壘が据えてあつて、此丘陵の北東の沿線には鐵條網を有する五個の歩兵堡壘が峙つてあつた。其次には廣き谷があつて一部分は海伯河が貫ぬいて居た、それから更に半圓形の、海より海に及べる、我々には危險極まる破滅の源となる孤山、大山、ワルデルセー及ブリンツ、ハイリリッヒ山等の丘陵山脈が連つて居た。(此丘脈中でブリンツ、ハインリッヒ山だけは恰も月の世界から奪つて來たものゝ樣に野趣ある傳奇的の形をなして居た。)是等の高地の後ろに更に又廣い谷が結合して居て、それに蘭家庄、董林庄、勞山の荒凉として裂開せる如き岩角が聳えて居たのである。

此場合我々は前面地には何事が起りつゝあるかを知る必要があり、且つ九月二十七日以後は全然我々は鐵條網の後ろに閉ぢ込んで居たので、果して何處に敵軍が其攻城重砲兵隊を配置するか。其樣子を知る必要があつた。所で此關係から我々が是迄繫留氣球に寄せて居た希望が全然水泡に歸して了つたので、今我々の目的を達す

るには唯臨機應變の偵察を斷行する爲め、余の飛行機を以てするより外に良案がないのである。

かくて余は倦まざる活動を續ける中に、八月の月日は過ぎて了つた。而して青島及就中前面の地區は殆んど舊態を留めなくなつた。砲兵陣地や防禦陣地が悉く堀開せられたのである、そして最も悲慘を極めたのは折角我々獨逸人が熱心と努力とを以て植へつけた青島の誇りとした美くしい木立が射角を大きくする爲め、斧鉞を加へられた事である。如何に多大の文明的構築物と、如何に多大の熱心と努力とが此忌はしい一擊の下に壞滅に歸した事であらうか!

八月二十三日即ち日本に對する最後通牒の滿期の日が來た、然も黄色人種の日本人に對して何等の回答に値ひせぬのは勿論の事であつた。此日の合言葉は「堅固に堅固を期せよ!」といふのであつたが、之は我々すべての衷心の叫びであつた。

其翌日に余は我家の椽側から遠く際涯のない大海原を打ち眺め、數浬の彼方に綴

やかに運動して居た敵艦の黑影を認めた。余は今日も猶之を記憶して居る。そこで余は望遠鏡を採つて敵の水雷艇を認めたのである。其とき急ぎ來たパッチッヒも亦それを認めた。然り、今日は二十四日であつた。今や敵の艇隊は我々に對し封鎖を開始したのである。

風說は矢張事實となつたのだ、嗚呼日本國民は敢て獨逸帝國を攻擊せんとするのである！

黃色人種の一帝國が英國人の微々たる助勢の下に戰鬪準備をした獨逸の一聯隊に向て、戰爭を開始したのである。

最後通牒の期限が滿了すると同時に、前面防備地及青島への進軍道路を出來るだけ長く防禦せんが爲め、一千人の軍隊が前面地に進出した。此一小團隊は其任務を優秀に果たした。初め三十キロメートルの範圍を、次に十キロメートルの範圍を極めて不充分なる砲兵陣地を敷て防禦するのであつた。青島の防禦には二軍團を必要と

した程の所に、僅かに一千人の軍隊が閉籠つて居たのである。時と場合に由て僅に斥候の一小集團が敵の一大隊にも對抗する樣な始末で、頑强な、恐るゝ所なき戰鬪をなして、彼等は二十倍の大敵から壓迫されつゝ漸々徐々に退ぞいたのである。九月二十八日に至つて初めて、此勇敢なる一隊は主要な障礙物の後方に退軍したが、かくて戰鬪の終結に至るまで常に敵軍を喰ひ止めて居たのであつた。

攻圍戰の初まつた頃、青島の有識階級の人々は余の飛行機の効用（一般に飛行に對してそうであつたが）を重要視しては居なかつた。

又今日まで當地に於て彼等が始めて飛行機を見て、我々の行動を批評するのでは此の如きことも、敢て恠しむには足らなかつたのである。

所が間もなく此考は一變した。

攻圍戰の初まる頃、或る日余は重ねて敵の艦船殊に敵の上陸部隊を監視せんが爲め、山東半島の南海岸を飛翔した。到る處各地の沿岸は死せるが如く靜かであつた。

そして何等眼を遮るものもなかつたのである。此方面は大丈夫だと安心して、余は飛んで歸つて來た。歸つた後夕刻余は同僚に會ふ序に總督府に行つた。其折偶然余は參謀長に出會つたが、其時此人は非常に急いで居た。といふのは彼は書籍を取つて來る爲め、今總督との重大評議の開かれて居る一室から一寸出て來たのであつた。

彼は通りすがりに余に向つて叫んだ「ブリッショウ君、どうだね、また飛んだかね？」

余は言つた「飛びましたとも、丁度今歸つた所です。私は數時間の間敵軍の上陸如何を見る爲め、海岸を偵察したのでしたが、敵の影も形も見えませんでした」

余は今日でも參謀長の驚ろいた顏色が眼の前に見へるのである。

「何だと！君は海岸を飛行した、そして君はそれを今になつて言ふのか。我々は二、時間前から集會して、今如何すれば敵の大部隊が、龍口灣に上陸するのを防止し得るかと云ふことを協議して居るのだよ、上陸の事は今日軍事探偵から通告があつた

のだ。君は今丁度其方面からやつて來たのだね、そしてそんな申し分のない報告が出來るかえ。だが兎に角總督の所へ行つて君が自ら觀察した處を報告したがよからう！」

此大會議は多言を費やさないで片付いて了つた。言ふ迄もなく軍事探偵の申し出は虛構であつたのである。

併し余は愉快であつた。余は飛行の名譽と自己の體面とを救つたのであつた。

兎角する中に余に取つて最も困難な、然も最も壯麗な飛行の時が來たのである。

其後間もなく余は飛行機に於ける火の洗禮を受けたのである。時は九月の初めであつた、余は遠く〳〵前面陸地の方を搜索して、千五百メートルの高空に在て美くしい日光の輝く日曜日を樂しんで居た。其とき余は突然脚下に今進軍しつゝある日本の大部隊を認めたのであるが、彼等は盛んに小銃や機關銃の砲火を余に浴びせたのである。余は機翼に十個の銃丸の穴を開けられた儘、悠然として歸つて來た。併

し爾後余は常に二千メートルの高度に在つたから、小銃や機關銃は余のモーターや推進機には危險を及ぼさなくなつたのである。

地上にて砲火の交換が間もなく始まつた。

其後間もなき或る日の事余は自動車にて、丁字口に行つたが、此處で我々は前哨の地位に立つて居たのである。不吉の念に驅らるゝ事もなく、余はそこの家の前に止まつた。所が驚ろいた事には、士官も卒も共に海の方へ向けて防禦してある內岸に沿ふて横になつて居て、盛に腕で合圖をして居たので、余は开は言ふ迄もなく挨拶であると思つて、同樣な合圖をして應答した。余がまだ自働車から下らない中に、頭上をヒューと音高く掠める響を聞いて後、すぐ耳を聾せんばかりの爆音が起つた。余の前面僅かに十歩の所、余の駐つた家の塀の眞唯中に最初の敵彈が爆裂したのであつた。そして余が喫驚して聊か茫乎として立ち疎む中に、引き續き再び敵彈がやつて來たのである。

そこで我々は自動車の中から拔け出で、矢庭に疾走して他の不完全、な掩蓋に身を凭れかけたのである。同僚は皆腹を抱へて哄笑した、事實今の場合は極めて重大の任務を帶びて居るのに、さりとは甚だ滑稽であつたに違ひなかつたのである。

一體何事が起つたか。オヤさて我々も氣が附いて見ると其理由が分つた。

日本の一水雷艇隊が我々の前方に現はれ、其砲火に因りて丁字口を破壞せんとして居たのである。前後二時間といふもの我々は何も見ず、掩蓋もなく、動く事も出來ないで榴彈の砲火に包まれて居た。その時日本人の晝食の休息が始つたものらしく、全く砲火を中止した。我々が其家の損害を巡視した時は既に小さな支那小兒共がそこに居て、榴彈の破片を拾つて居たのである。それから我々が一寸珈琲一杯飲んで居ると、三人の支那少年が其汚れた小さな手に三つの爆發しない榴彈を持つて、喜び勇んでやつて來て、其彈丸を平氣で我々の前の卓の上に投げたのである。若し破裂でもしたら我々は素敵な爆烟の馳走に接したのであつた。

そこで我々は歸らなければならなくなつた、自動車が第一の岩谷に曲り込むと、後ろの方で再び砲聲が起り榴彈の爆破が始つた。

其後暫らくすると、丁字口附近の地を敵に明け渡さなければならなくなつた、そして九月二十八日に我々は主要障礙物の後ろに閉鎖されたのである、それと同時に海上から敵艦隊の大砲撃が開始された。

丸で舞踏會の樣なものであつた！

此日早朝余は身を淨めて大飛行をなさんと思つて、鼻歌を謠ひながら浴槽に浸つて居ると、突然耳を劈く樣な音響が起つた。此頃既に我砲臺の巨砲は夜となく晝となく鳴り響いて居たので、此大音響に對しても別段注意もせず、之は今迄彈藥を省略せん爲め沈默して居たビスマーク砲臺の二十八珊榴彈の砲火だなと思つて居た、但し余の別莊は其麓にあつたからである。

余は萬一異變があるまいと思つて、從卒を余の飛行機の所へ遣つて見た。所が數

分間も過ぐると彼は呼吸を切らし、顏色を變へ慌たゞしく歸つて來て箇樣に報告した。「中尉殿、私共は至急此別莊を去らなければなりません、私共は四隻の大艦から砲撃されて居ます。たつた今重い榴彈が飛行機格納庫のすぐ側で爆裂したのですが、幸に飛行機は無事で、又誰も負傷した人はありませんでした。私だけは指を少し怪我しました。と言ふのは大きな立派な爆裂の破片がそこにありましたので、私はそれを記念に拾ひ取らうと思つたのです、所がそれが非常に熱かつたのです、でも持つては參りました」と言ひながら彼は嬉しげに半ば燃えたハンケチを取り出したのを見ると、その中には三十珊半の榴彈の破片があつて其大さ恰も人間の腕の長さ程あつた。其時余は浴槽から出てから二分も過ぎない中に、余は其大危險に瀕した飛行機の格納庫に來て居た、そして我々は從卒と力を合して飛行機を倉庫の反對側に移した、そこで我飛行機は丘陵の斜面の後方に移されて、以前よりは稍や安全に置かれたのである。それから余は海岸の望樓に駈けつけて、砲撃の光景を眺めんとし

た。

此望樓は或る丘の上にあつて、其地區からは青島全體を一目に見渡すことが出來るのであつた。此處に立ちさへすれば、榴彈の落つるのが一つ一つ見られたのである、それで余は其次の週の間飛行をしない時には、此高地の上に立止まつて戰鬪の狀況を觀望して居たのである。

九月二十八日に於ける最初の砲擊は特に深い印象を余の腦裡に刻した。

榴彈の爆發や轟音は四方が山で反響を生じた爲めに一層强かつた。一發又一發と長い三十珊半の敵彈が飛び込んで來た、このとき我々は青島が修羅の巷と化するかであらうと思ふ感じがして居た。だが此物凄い心持に間もなく我々は段々に慣れて來た。併し我々は此の如く飛込んで來る敵彈に對して、全然抵抗する力がなく、萬事終了する迄手を拱ぬいて坐視する外に途がなかつた。

恰度斯くの如き凄寥な怪物の風を切つて落下する所に居なかつた人は誠に幸運と

言はなければならぬ。

此日と猶其後の砲擊は英國人に取つては何と恥辱な事であつたらう！

敵艦は我々の大砲の彈着距離以外に遊弋して居た、換言すれば全く安全な位置にあつたのである。最初に三艘の日本の戰艦が先頭に立ち、其後ろに從ひ殿艦として、日本軍の命令の下に英國の戰艦「ツライアンフ」が動いて居た。

何と意氣揚々として、こんな惡魔の仕事に當る爲め、是等の英國人は現はれ來たのであらう！

仕合せな事には此砲擊に由て加へられた我損害は多大ではなかつた、そして今日以後は敵の砲擊に對するに極めて沈着の態度を以てしたのであつた。

此日の夕方余は殊に悲痛なる出來事に遭遇したのである。

我が砲艦「コルモーラン」「イルチス」「ルクス」の三艘は先づ其武裝を撤去した後、自ら沈沒したのである。

我々は實に自ら慰むるに言葉がない程悲慘な光景であつた。

此三艦は舳艫相銜んで、一汽船に曳かれ沖合遙かに追拂はれた上、火を船中に放て爆破せしめて燒棄したのである。其有樣は誠に無慘の至であつた。此三艦は恰も屠所の羊と云ふやうに見えた。彼等は限りない悲哀の面持で、救助を我々に乞ひながら其裸體のマストを高く天空に冲して泣くやうに見えた、そして燃え上る火焔の中にあつても、尙ほ生けるものゝ如く、巨浪を其背上に粉碎しつゝ、萬斛の哀愁を奪ひ去つたまでは、悶えに悶えて狂ひ死になつたやうであつた。何人も此有樣に對して鐵石の如き心も張り裂けんばかりであつた！以上の三艦に續いて汽船「ラウチンク」と「タク」との二隻が自沈し、開城の少し前に小砲艦「ヤグアール」と墺太利の巡洋艦「カイゼリン、エリサベット」とが、我々に對して莫大なる任務を果たした後で、同じ運命を共にしたのである。此最後の二隻の活動振りは實に靑島の苦戰を語る歷史に於て光榮ある最終の頁を飾るに足るのである。

四　日本人の戯謔

日本の攻圍軍の活動は我々には大なる謎であつた。最初の大砲擊の後、日本人は直ちに我城壘を襲擊するであらうと思はれたが、そんな事は影だも見えなかつた。我々には丸で敵軍の心が分らなかつたのである、彼等は我々の兵力の如何に微弱であるかは知つて居り、又城壘に闖入するには唯一つの鐵條網を奪取すれば宜い事も知つて居た筈である。

其時我獨逸軍側に極めて荒唐不稽の流言蜚語が湧き出でた。

「日本人は我々を進んで攻擊しやうとはしない、歐洲の戰況は我々に取り極めて有利なのであるから！」「亞米利加人は我々を援助せんが爲め其艦隊を派遣しつゝあるから、流石の日本人も退去しなければなるまい！」「日本人は我々を唯兵糧攻めにせ

んとするのだ、彼等は青島が出來るだけ無難に其手に落ちん事を願つて居るのだ」

併しすべて是等は唯愚にも附かぬ推察に過ぎなかつたのである。

日本人は沈着で秩序正しく且つ何等我々の妨害を蒙る事もなく、其軍隊の上陸を了り、道路や鐵道を設け、最も重き攻城砲や彈藥を輸送し、我々の障害物に對して塹壕を堀鑿し、我が防禦線に對し前進作業をなしたのである。

今や余は空中に活動振を開始した、即ち敵の重砲兵隊の位置を探索する爲めである。

此頃は毎日〳〵天候が好いので、余は推進機の許す限り、早朝夜の明けかゝる頃には必ず飛行機の側に來て居たのである。

そして未知の運命を前にして余は上昇したのであつた。太陽が昇る時には、余は高く蒼空に飛翔して、一時間あまりも敵の陣地の上を瞰きながら旋回飛行をした。今や我々に窮死と破滅とを齎らすべく敵兵が横着にも宿營して居る我が防備區域の

上を一生懸命に搜索したのである。

余の活動は難事ではあつたが頗る美くしかつた、そして又其成功に依りて余の努力は充分に報償せられたのであつた。

余の飛行が相應に効果のあつた事は、敵が余を打ち落して、其危害を除かん爲めに色々の努力をなして居るのを見てもよく知られたのである。

余は既に一言した如く、今や青島に於て唯一人の飛行家で、支那人の命名に依ると、「青島の鳥王」であつたのである、然も使用し得る飛行機は此「鳩」一つであつた。そこで余の最も注意すべきことは出來得る限り之を保護して、破さない樣にするのであつた、でないと余の飛行は一切行はれなくなるのである。

當地の飛行場は殊に狹く小さくて、四方は釜の樣な高嶺で包まれて居るし、且つ氣流の關係が甚だ面白くなかつた爲めに、飛行の初めが非常に難澁であつた。此地の地形は高峻な山峰が連り、陸地と海とが交錯して居る。且つ太陽の照射が强烈で

著者海軍大尉グンテルリツシヨー

ある爲めに、空氣の動搖が常に烈しく、盛夏の朝八時頃の氣流は、獨逸に於ける盛夏の日正午前後にも殆んど見られない程に不良のものであつた。斯かる大地に於ける飛行家の困難は、自ら經驗した人でなければ到底理解が出來ぬのである。

加之、余の飛行機は本國の氣壓を考へて造つたものだから、此の如き稀薄な空氣の中では餘りに重きに過ぎ、モーターの廻轉力は百廻轉ほど少ないし、それに推進機は既に述べた如き臨機の作業で出來上つたものである。

だから余が觀察者を同乘しやうとは思はなかつたのに何の不思議があらう。余は機の重量を輕くする爲め、苟しくも省略し得るものは、すべて機から取り外したのである。ベンジンや油は漸く間に合ふ位に測り入れたので、時には飛行機と共に飛行場から飛び出る爲め、余の毛皮の上衣をも自宅に殘して置いたのである。

スタート、何時も之が實に余の運定めをするのであつた!。

出發(スタート)はすべて甘く行かなければならなかつたのである。之が失敗すると余と飛行

機とが破滅に陥ゐるのは勿論であつた。

飛び出すとき余は常に生死の戰機を決するのであつたので、飛行機が間一髪といふ所で破壞せずに濟んだ事も度々あつた。

余が南方へ向けスタートした時の如き、度々塲の終端の所、即ち大凡灰泉角の堡壘が海に合する所あたりに、巨大な下降突風が發生して、飛行機は余の脚下に降下し、余は危くも堡壘の大砲に近つき其砲身に撞着せんとして漸く慘死を免れたこともあつた。又或るときは突風に煽られ强く下方に壓迫されて、機が海面に墜落せんばかりの所で漸く助かり、徐々と舵力を恢復して攀ぢ登り始めたことなどもあつた。

又北方へのスタートも（以上の二方面以外のものは問題とするに足らぬ）頗る恐ろしかつた、全體の飛行を試みた間で余は此方面へは僅かに六回か七回のスタートをなしたに過ぎなかつたが、其代り左記一回の飛行は終生忘られないのである。

其時余は塲の最南端から出發しなければならなかつた。そして一直線に、僅かに

數百メートルの長さの飛行場を越え、格納庫を越え、多くの別莊を越え、我々の教會堂を越えて行つた、此教會堂は既に約百五十メートルの高さの狹い馬鞍狀の處にあつて、兩側はビスマーク山とイルチス山との岩層になつて圍繞せられて居た。余がビスマーク山を左手の後ろにするとすぐ前には最初の峽谷が現はれて居て、此中から鋭どい突風が起つて余の飛行機に一大衝擊を與へ、右舷の方へ傾かしたのである、で、ありつたけの舵力を加へたけれど、余は再び機體を上に向ける事は出來ず、又横舵を與へる事は出來なかつた、何故と云ふに岩石の中へ疾走する恐れがあつたから

そこで飛行機の位置は此儘で、其右翼の尖端を僅かに數サンチメートルばかり、下の方の樹木や岩層をすれ〳〵に離して、此地獄谷を出て驀進した、其際余は地下へ打ち當てゝ碎けない樣に、鐵石の如き沈着心を以て靜かに舵を操つたのである。終に余は膠州灣の水を越えて彼岸に飛翔し、機體も再び常態に復して來た。

余は今茲に自白するが、スタート毎に熱汗と冷汗とが流れて居たのである、そし

てスタートを無事に終へて、次第〳〵に高く舞ひ上り艦て二千メートルの高さに達した時には、余は衷心嬉しかつた。何れにしても是は忍耐の試驗であつた。時とすると余は一時間許にて高空に上つたが、普通は如何しても一時間四十五分位はかゝつたのである。此時間中日本人が余を目掛けて打ち出す鐵筩彈を避けんが爲めに、遠く〳〵外海の上を飛翔したのである。

余の飛行機が陸上飛行機であつたから、若しモーターが少しでも停止すると自分は溺死しなければならぬ事など毛頭考へ込む暇はなかつたのである。但し陸上で停止しても同樣だが、或は敵彈に中つても、矢張り同一運命であつたのだ。我防備區域内到る處岩石と峽谷とでない所はなく、余の飛行場を除いては、無事着陸し得る樣な個所（小さい所としても）は一箇處もなかつたのである。

此の如き苦心が最初の程は腦裡に浮んだり消えたりして居たが、所詮無益な事と考へ直したから、其後再び起らぬ樣になつた。

此攀ぢ登りの時間中は、余は美くしき日光を身に浴び嶮しい巖石だらけの海岸の見るも恐ろしき奇景と濃緑の海とを樂んだ。かゝるとき余は小歌を口吟んだり、又は口笛を吹いて得意がつたことが多い。そして高度計が二千メートルを示すと、余は「有難い」と唸つて、一番近い路を取つて敵線に驀進し、偵察運動を始めたのである。

偵察運動は下記の樣にして果たした。余は敵の上空に來ると、飛行機が自らその高度を維持する樣にモーターを塞いだ。それから地圖を我面前にある上り舵の上に掛け、鉛筆と手帳とを手に握り、そして翼と機體との間から下の方を透視して、敵狀を偵察したのである。そのとき上り舵は全く放任し、兩足で横舵を把つたのである。

余は各陣地に來る毎に、此の如く觀察を遂げ、地圖に記入し、手帳に詳密にスケッチを一枚仕上げる迄は、幾回もそこを旋回飛行した。間もなく余は此任務に可な

りの熟練を得て、全く上方を仰ぎ見る事をなさずして、一時間半乃至二時間位精密に下の方を觀察し、敵狀を明細に記入するを例とした。

そこで頸が强張つて來ると、余は身を廻はして他の方面を下瞰したのである。かくして余は滿足する迄路圖を取るのである、それからベンジン計に一瞥を與へ、飛行場に達する如く、夫から歸路につくやうに運動したのである。

飛行場に歸還する通路はいつも同樣であつた。意氣揚々と弓形を描いて埠頭や市街の上を旋回し、飛行場の上空に着くと、モーターを中止し、勢鋭く孤狀の滑走飛行で地上に向つて進み、四分後には無事大地に停つて居るのである。

此場合に敏速は必要條件の一であつた！

余が敵の陣地の上を飛翔して居る間は、言ふ迄もなく極めて猛烈に、余の飛行機は小銃や機關銃の發射を被るのであるが、それが何等の奏功もないので、今度は鐵箭彈が飛んで來て余の身邊を掠め過ぎたのである。兎角このときは忌々敷いもので

あつた。

日本人は再三再四余を喫驚せしめたのである。或る快晴の朝、空は碧く立派に光つて居る中を衝て偵察飛行から歸つて來て、將に着陸せんとするとき、飛行塲の上空約三百メートルの高所に、天上から見ると極めて小さい白色の雲塊の如きものが浮動して居た。

併し間もなく余は日本人が又もや自分に對し惡戯を試ろみて居るのだと知つたのである、何故と云ふに彼の雲塊と見えたのは實は十珊半の鐵筈彈の爆破の煙であつた。

併しそれは余の飛行機を破るに何の甲斐もなかつた、余は堅く口を結んで其中に突進したのである。

四分後には、飛行機は二千メートルの高空から墜落飛行をなして無難に飛行塲に停まつて居たのである、そこで余は出來得るだけ迅速に、全體の屋根を泥土で塗り

堅めた格納庫に機を曳き入れた。

今や余が僞計を用ひて敵の眼を欺く時が來た。

あるとき余が敵の陣地の上空にあつて、突然モーターを中止して、垂直に飛行塲の一角に向け風を切つて進んだ。すると日本人は余が射落されたものと信じ、非常に驚ろいたものらしく、余の飛行機が既に格納庫に入つた頃、漸く彼等の鐵筈彈が塲の上に飛んで來たのである。

併し余が幾回となく偵察運動に來たものだから、日本人は其十珊半の巨砲二門の位置を變じ其一門は遠く後ろの方へ、他の一門は側の方へ移したのであつた、其結果余が數時間も彼等の陣地の上を旋回して居る間、彼等の鐵筈彈が易々と余の身邊に達したのであつた。之は余に取つては極めて危險千萬の事で、若し余にして突然鋭どき方向轉換に依りて其命中を避けなかつたなら、余の生命は殆んど奪はれたのであらう。

鐵筩彈は極めて余の身近くに爆破するので、モーターの音の騷がしいにも拘らず、爆烈の響が明かに聞ゆるは勿論、烈しき空氣の壓迫を顏面に感じたりした、そして飛行機は丸で荒海に於ける古樽の樣に强く搖動し始めて、余は偵察運動に從事中甚だしく不愉快を感じたのであつた。

余は茲に公言して置くが、余は毎日飛行を了つて無事に着陸する毎に、名狀し難い喜悅の情と重任を果した後の滿足とを泌々と感じたのである、否、余は多くの場合嬉しさの餘り只管力强き歡聲を發したのである。

此外に尙ほ考ふべき事がある。地上に著いてから思ふと、僅に四分前には我身は二千メートルの高空に居つて、數時間も無上の憂慮と危險とに接近しつゝ、彈丸や鐵筩彈を發射せられたにも拘らず、今は此美くしき地上に佇立して、再び靑草を履みつけて居たのである！

余が立ち上るや否や、鐵筩彈の霰雨を毫も意に介しない四人の勇者が急ぎ進み來

て機を隱匿すべく余の手助けをした。又余の忠實なる犬フスデントは樂しげに吠へながら彼等に飛び掛つて居た。

此四人が飛行機を次回の飛行の爲めに整へて居た間に、余は自働車の中に在つてハンドルを手にして居たのである、其時胸のポケットには地圖と報告とを入れ、我側には愛犬フスデントが居た、かくて余は又鐵筩彈の砲火の中を急馳して飛行場を過ぎ、總督府に突進したのであるが、此時既に余の報告は待たれて居たのである。

若し余が空中で描いた略圖を公表する事が出來たなら、世人は必ず余の喜悅の情と一種の誇りとを理解するであらう。余は屢々一日に五箇處乃至六箇處の敵の砲臺を發見したのである、そして余の觀察は報告用紙の四頁を滿たしたことが度々であつた。

總督閣下や參謀長が熱誠を以て握手されたのから見ても、其價値は充分明らかなるのであつた。

夫れより余は朝食を喫し、休息せん爲め家路を指して乘車して居ると、既に砲臺の大砲は殷々たる響を發して、其鋼鐵の霰雨を余が新たに偵察した陣地の中に投げ掛けて居た。

五　余の空中戰

余の住宅の有樣は極めて痛ましいものとなつた、如何にも淋しげに、打捨てられて、荒凉たる姿を呈して居た。

攻圍戰が開始すると同時に余の友バッチヒは其住宅を捨てゝ、砲臺指揮官として二十一珊砲臺に行くやうになつた。彼は僅かに四週間あまり其美くしき住宅にあつたばかりで、その後は穹窖内に座臥して、彼の義務を果たし、遂に彼の最後の榴彈を射盡し、日本人が其二十八珊の榴彈砲を以て彼の全砲臺を一塊の荒土と化して了つたまで勇氣と忍耐とを續けたのである。

我住宅に最初の一彈が見舞つて來たとき、支那料理人モリッツは不忠實にも余を捨て置いて逃げ去つた、それから或晩のこと、フリッツもマックスもアウグストも

皆跡方もなく逃亡した。

數日を過ぎるとヴキルヘルムと言ふ新らしい支那料理人が來て、えらい手眞似をしながら語つた。

「鳥の王さん、私は立派な料理人です、私はあの惡黨のモリッツの樣に逃げはしません、私は恐はくはありません、私は立派な料理を澤山拵らへて上げます」

余は彼の言ふ所を信じ、給料を五弗程餘計に與へて傭入るゝ事に決めた、それで事態は甘く進んで居たが、或日の事敵の榴彈が余の住宅の附近に初めて爆破すると、ヴキルヘルムの先生此前の男同樣に跡白浪と逐電して了つた。

今や余は忠實なる從卒ドルシユと共に、自炊の生活を營まなくてはならなくなつた。

我々二人は今イルチス港の全別莊區の唯一の住民であつた。

無論茲に滯在したのは決して愉快でもなく、又安全でもなかつた、何故と云ふに

莊別は我々の主要砲臺のある岡の上に設けられて居て、此側を通過する敵の榴彈は殆んど我々の頭上に落下するやうであつた。併し我々二人は大に注意深かつた。即ち我々は二階から下りて、階下の室を片付け茲に住居を拵へた。其上我々は直接に窓の側にて休息しない樣に注意して、室の片隅に寢床を構へたのである、これなら至極安全であると信じた。

其後間もなく余は空中に在ても單獨ではなくなつた。

九月五日の午前に、雲が低く垂れて天候不良の兆を呈する折、余は突然モーターの音を耳にしたのである、何事かと思つて戸外へ驅け出して見ると、其時既に我々の頭上に近く、雲の中から巨大な複葉飛行機の姿が現はれたのである。余は之を望んで何んとも物が言へなかつた。そして丸で魅せられた樣に茫然とした。すると間もなく地上に爆彈が破烈して囂然たる響が轟ろいた、そして余は又明らかに此飛行機の機翼の下に大なる赤い球の垂下されるのを認めて思はず斯う獨語したのである。

「ヤー日本人が來たのだ！」

余は茲に自白するが、時に余の頭上を掠めて敵の巨大な繫留氣球が彼方へ浮揚して居るのを見て、奇異な感が起つたのであるが、之は將來面白い話の種になるのだ。

青島の人に取つては敵の飛行機の出現程極めて不愉快なものはないと云つて甲乙とも驚異の眼を睜つた。何故と云ふに、眞逆日本軍が我々の樣に飛行機を持つて來るだらうとは何人も豫期しなかつたからだ。

日本軍は青島の攻圍戰に於て全體で八機ほどの飛行機を有した。其中四機は優れて大きな水上複葉機であつて、此點に關して余は痛切に日本人の幸福を羨んだのである。

其後の數週間と云ふものは極めて見事な新造の大きな日本軍の水上複葉飛行機が毎日市街の上を飛翔した。そのとき余は如何に戀々として上空を見上げたらうか。自分の方にもあんなのが有れば宜いと想つたのである。

日本人の飛行振は立派にやつて居た、然も甚だ機敏にやつて居た、此點は大に彼等の技倆を認めてやらなければならぬ。

されど彼等の爆彈投下は案外に拙劣であつた。是は我々一同の仕合せであつた、さもなかつたら、我々は何等かの災厄を蒙つたであらう。

日本飛行機の投下した爆彈は至つて强烈で、最新式の構造で、殊更激しき爆裂力を有して居た。

敵の水上飛行機は一種の特徴を有して居た。彼等は戰線を遠く外れた場所に於て、全然我軍の妨害を被る事もなく、又風の方向などに頓着する事もなく、急がず騷がず、平氣に出發する事が出來たのである。其飛行場は充分に滑走の距離があつて、思ふ存分に活動することができ、風の方向の如きは一切お構ひなしであつた。そして確實に三千メートル以上の高度に達した頃、彼等は我々の上空に驀進して、我々の鐵筒彈や機關銃の砲火を蔑視するを例として居た。

敵の飛行機より爆彈を投下するや、其の主なる目標は我が飛行機格納庫であつた。

此襲擊運動は我飛行機に取りて頗る危險な問題となつたから、或る日余は我飛行機を他處に移轉して、敵の同役を巧に瞞着してやらうと決心した。

我軍の實際の格納庫は飛行場の北端にあつて、上空からは極めて好く見え、無論日本人の眼にも充分留つて居たのである。そこで余は今度徐ろに丁度場の南端に新格納庫を建設し、之を直接丘の傾斜面に凭せかけ、泥土と芝草とで蔽ひ、上空からは實際少しも見えない樣にした。それから我々はありつ丈の智慧を絞つて、木板や帆布やブリキ板で僞物の飛行機を製作して置たが、之を上空から見ると、余の「鳩」にそつくり其儘であつた。それで今後は敵の飛行家が來る毎に我々は面白い芝居を演じたのであつた。

或る日元の格納庫の入口を開けて、其前に美くしい綠色の蘭草の茂る野の中に、伸々と樂しげに余の贋物を出して置いた。又他の日には其入口を閉ぢて何も見えな

い樣にした。それから又或日は贋物の飛行機を他の位置に於て芝生（此處では特にそれが浮き出て見えた）の上に据へて置いた、此の如き工合に作業を續けたのである。すると敵の飛行機が飛んで來て、幾回となく爆彈を投げつけて、此罪咎もない大鳥を打たんものと焦慮したのである。之に反して我々は眞物の飛行機と共に愉快に且堅牢な掩護を受けて、飛行場の南端に在つた、そして敵の機上より投下する爆彈が盛んに其憐むべき犧牲を見舞つて居る。我々は此滑稽な芝居を見て皆抱腹絶倒したのである。

或る日殊に多數の爆彈が投下されたとき、余は日本軍の飛行機から投下された爆彈の一破片を取つて、之に余の名刺を結びつけ、その餘白に斯う認めた。「敵軍の同僚の方々に御挨拶致します、なぜ諸君はあんな固い物體を地上に投げつけるのですか。我々の眼に譯もなく這入つて困るぢやありませんか。そんな事は止めて下さい！」

かくて次回の飛行の際に此名刺を持つて行つて、日本の水上飛行場の前に投下した。

併し右は余の訪問を報ずるだけに過ぎなかつたのである。

其間我砲兵廠に於ても余の爲めに爆彈を拵らへて呉れたのである。开は全くどえらい物であつた。大きな二キログラムの葉鐵罐（ブリキ）（其上には明らかに「ジータス、ブラムベック商會、最良ジャヴァ產珈琲」と記してあつた）にダイナマイトと蹄鐵釘と鐵片とを塡充したのである。而して下部には尖つた鉛がつけてあり、上部には點火器があつて、之に尖つた鋼鐵の針が當る途端に藥筒の雷管を打ち、それが爲め爆彈が破裂する樣になつて居た。余は此怪物を見て幾分か氣味惡く思はれたので、丸で生の卵に對する時の樣にそれを摑んで、投げつけて了ふといつも衷心嬉しかつたのである。但し是は多大の損害を惹起さなかつた。一度余は之を敵の水雷艇に命中したが、遂に爆發しなかつた。余は何度も運送船を捕獲せんとしたが、或る時日本

軍側の報告に從へば、余の投げつけた爆彈が敵の密集せる部隊の中に落下して、一擧に三十名の黃色人種を地獄に送り屆けたといふことであつた。

又或場合に自分は甚だ胸の苦しい事があつた。といふのは、或る日早朝、余の愛する從兄弟（英國人のこと）の野營を探し出して、彼等が朝の馳走に余の純粹なジャヴァ產の珈琲を寄附してやらうと思つて、一生懸命に活動した。其後英軍側の報告で見ると、余の爆彈は彼等の菓子のやうなテントの上に落ちたが、之は彈力が强かつたので、爆彈は跳ね反されて何の効果もなかつたのである。

兩軍とも爆彈投下の樂しみは、其後間もなく絕えて了つた。我航空軍は余が常に一人であつたので、毎日々々多忙で、何としても爲る事は有り餘る程あつて、仕事は少しも捗取らぬのである。又効果から言つても、爆彈投下に要する時間を償うには足らなかつたのである。

敵の飛行家とは空中で屢々遭遇した。勿論余は奇遇を悅んでは居なかつた、余は

單獨で余の飛行機は上昇力が極めて鈍いから、敵の三人同乘せる大複葉機と對戰は出來なかつたのである。其上余は偵察といふ任務を帶びて居たから、青島に於ける唯一の此飛行機を無事に持つて歸るといふ誠に面白くもない境遇に在つた。

或時自分が偵察に出懸け、一心不亂に飛翔して居ると、我飛行機が非常に烈しく縱横に動搖を始めた。それで余は斯う考へた、多分氣流の變動が浮山の嶮峻な山脈に依つて起され、上空に於ける飛行を最も困難たらしむるのだと。夫故に余は上空を仰視する事もしないで、偵察飛行を續けて居た、そして機體を平靜にする爲め、唯一方の手で上り舵を握つて居た。

其後歸つて來てから友人の話すのを聞くと、誠に驚ろいた。敵の飛行機が一臺余の頭上の方を近くすれ〳〵に飛び去つたので、我友は余の飛行機が之に依つて射落されたと思つたとの事であつた。

又其次の折に余は一層注意したところ、すぐ脚下に敵の陸上飛行機臺を發見し

たから余はそれに追及して、三十發のバラベルム式拳銃で射落してやつた。

それから間もなく余自身も亦同樣な苦しい立場に陷つた。そのとき余は僅かに千七百メートルの高度にあつて、必死の努力をなすに拘らず、夫より以上の高さに昇れなかつた。自分は丁度其時敵の水上飛行機が碇泊する海上を瞰下しつゝあつた、其敵の大複葉機一臺は悠然と出發して來たのであつた。然も自分は偵察を續けながら斯う考へた。「彼奴が我身の占むる高さに達するには、隨分長い間這ひ上らねばなるまい」

所が漸く四十分内外を過ぎた頃、余が機翼の上から左方に遠く望み見ると、敵は已に數千メートルの彼方に在て余と殆んど、同高度の空中に浮動して居たのである。

「ヤー是は大變だ」余は細心注意して一層高く上昇しなくてはならぬ。所が丸で何物かに魅せられた樣に、余の飛行機はストライキをした。余は夫より一メートルだも上ることはできなかつた、然も十五分の後には敵機は遙かに余よりも高空にあつ

たのである。そして敵は斜に余を目掛けて突進し來つた。其時敵は余の歸路を絶たんとする考であるのを余は知つた。

そこで余は逃る。敵は余を追ひ速力の競爭が始まつた、何れが先着して青島の上空に現はれるであらうか。

此時余が勝利の榮冠を占めた。

余は飛行場の上空に來てから、急角度の墜落飛行をして下降した。そして漸く飛行場の地上に停つたとき、敵は爆彈を投下して、自分のすぐ後ろでズドーンと爆發した。

こんな爆彈は時とすると美事に命中するから誠に恐ろしい！

青島では「敵機が近接する場合には何人も皆直ちに掩獲物の下に入り、預め何等の損害も蒙らない樣にしなければならぬ」と云ふ訓令が出た。夫故に人々は皆注意したから、餘り怪我はない。唯一度だけ下士が負傷した。又支那人が一度やられた

だけである。然し之だけでも不思議な程少數なのだ。何故と云ふに、飛行場では毎日支那人が百人あまり仕事をして居て、飛行機が近づくと彼等は皆迅速に安全な場所に避けたのである。

或る日敵の飛行機が現はれたとき、多くの人は皆安全の場所に匿れたのに、只獨り一人の顏色の澁染せる如き間抜野郎が飛行場の眞唯中にボカンと座つて居て、驚きながら飛行機を見て居た。するとブーン！と爆彈が落ちて來て丁度此阿房鳥の數歩許近傍に爆發して、彼の身體に重傷を與へたのである。

余は此爆彈に就て言ふが、大抵の人は中々其災害を受けない。でなければ非常に運が惡くて、丁度榴彈や其他之に類似の危險物が落下する所に立つて居る人でなければ容易にあたるものではないのだ。

六　歡呼喝采の聲

兎角する中に青島の戰況は日に益切迫しつゝあつた。海からの砲擊は晝間殆んど絶間がない。加ふるに又驀て陸上重砲隊もやつて來て、共に力を合せて此修羅の巷を脅嚇したのである。爆彈に對して破れない樣に出來て居る土舍や穹窖を除いては、最早や青島全區域の中で安全な個所は一つもなくなつた。而して敵の砲擊は日一日と其勢を加へ刻一刻と烈しくなり增さつた。一日の間に海からだけで此狹小な青島の陸地に向け、數百發を算する程三十珊半の榴彈が發射せられたことも度々あつた。

十月十四日に會姓岬に於ける我海岸砲臺の猛烈な砲擊が始まつた。敵艦は遠く外方に遊弋して居たが、既に第二回目の一齊射擊の後には、三十珊半の榴彈は此小砲臺を殆んど破壞し盡して居た。夫れから一齊射擊に嗣ぐに一齊射擊を以てしたので

ある。そこで此砲臺は全部水柱と火焰と硝煙とに包まれ、天地を震撼する如き榴彈の爆破と轟音との爲め青島の岩壁帶は搖動いて居た。

余は常の樣に今朝も又此砲火を集中されて居る要塞から、僅かに約千メートルを距れたる例の海岸望樓にあつて、極めて近く此慘澹たる活劇を目擊したのである。

長さ一メートル以上の鋭どい榴彈の爆片は屢ヒユー〳〵ブン〳〵と叫びながら氣味惡く我々の頭上を掠めて飛んだが、我々は餘り意にも介して居なかつた、余は今砲擊せられつゝある要塞の光景を側目もふらず見つめて居たのである。此有樣と言つたら、其猛烈さ加減は迚も禿筆のよく盡し得る所ではなかつたのである。

こんな事は實地に經驗するより外に方途はない。

我々は忠勇無二なる守備隊員の身上を思ひ浮べ、彼等が確かに破滅したに違ひないと思つて、漫に暗涙を催ふすのであつたが、豈圖らんや、此狂暴なる砲火の眞唯中にあつて、書式二十四糎の加農砲が轟然一發を放つたから、我々は皆手に汗を握

ゝながら双眼鏡を把て敵艦の方を覗いた。

突如、歡呼の聲が我知らず咽元から湧き出でたのである、見よ彼方に我砲臺の榴彈は英國の戰艦「ツライアンフ」の甲板の中央に命中した。「ツライアンフ」は時を移さず艦首を轉じ、全速力を出して沖合に逃げ出した、で其後間もなく我第二の榴彈が見舞つた時には其艦の後方五十メートルの所で海中に落ち込んだのである。

それから「ツライアンフ」は日本の旗艦と二三の信號を交換した後で遙に逃亡し、修理の爲め横濱へ行き去つた。

夫から日本の軍艦三艘は尙ほ砲擊を續けて居たが、今回は充分の遠距離に去り、我舊式加農砲の着彈以外に居たので、我發砲の効果は全く無益となつた。

正午頃になると漸く砲聲が止んだ、無論其時敵も味方も等しく此要塞が破壞せられ、其守兵は殆んど皆戰死したことゝ、確信して居たのであつた。

そこで直ちに海岸望樓附の一將校は會姓岬の要塞に急行した、余も亦自動車で其

後を追ふた。

余は彼の砲臺で必ず戰慄すべき光景を見るだらうと豫想して居たので、同處に到着すると、其損害の意外に輕微なるのに驚いた、といふのは守備隊は全員殘らず喜び勇んで彼方此方に跳ね廻り、爆破の彈片を拾ひ集めて笑ひ興じたり、敵の榴彈が落ち込んだ巨大な裂孔などを眺めたりして居たのである。

其時余の喜悅と言つたら全く言語に絕する程であつた。砲臺では唯の一人の負傷者もなく、大砲一門の破損もなく、爆彈に抵抗し得る樣に出來た防禦工事の完全な塲所は何處も貫通せられたのはなかつた！

敵の重砲々擊の効果といへばビスケット箱が一つ破れたのと、兵員のシャツが一枚（乾かす爲めに吊るしてあつた）裂けたゞけであつた。

然も日本軍は此目的を達せんが爲めに、五十一密乃至三十珊半の發砲をしたのである。

薄き裝甲圓蓋の一箇處を重き敵の榴彈が滑らかに貫通したが、幸に爆發もせず、立派に砲側の鐵板の上に横たはつて居た。

我軍に於ける射擊術の巧妙なりし謎も今は全く解けた。即ち我大砲は本來唯百六十――百の着彈距離しか持つて居なかつた。然も砲手が一意專心の努力と、不屈不撓の熱心とを以て奮戰した結果、大砲は十六分の數度だけ高く向ける事が出來、其が爲め彈着點が二百乃至三百メートル以上も遠き處に達したのである。

かくて砲身を最高度の仰角に据え彈藥を裝塡して、忠勇無二なる守備隊員と沈着剛毅なる砲臺指揮官海軍中尉ハスハーゲン氏とが恐ろしき榴彈の砲火を浴び、硝烟を冒し乍ら、徐に砲身を固定して敵艦が着彈距離内に來るのを待つて居たのである。

そして其第一彈が即刻奇功を奏した。

然も愉快であつたのは、其發射が當然我々の目指す怨敵に命中した事である。

殘念なる哉、我々が第二彈を發射する時には、「ツライアンフ」は跡白浪と遠く逃

亡し去て居た。さもなくば同艦は當日既に奇しき運命に際會したのであつたらう。

併し同艦は所詮沈沒の悲運を避くる事が出來なかつたものと見ゆる。

我砲臺員が英艦「ツライアンフ」に對して最後の留めを刺さなかつたことは、頗る遺憾であつたが、是より數月後、我潛水艇長ヘルジング大尉が充分に成功して呉れたのは甚だ愉快である。乃ち千九百十五年の春、彼は我々青島在住者の爲め復讐したのである、彼は潛水艇を以てダーダネルスの沖合にて此「ツライアンフ」を襲擊し、哀れ海底の藻屑と化して了つたのである。

我等青島人は之に對し切に彼に感謝する！

會姓岬要塞の將卒と余との間には深厚なる連絡があるのである。

余は當然同要塞の人々と喜憂を同じくして居た、何故と云ふに余の飛行場は其要塞と境域を接して居たのみならず、砲臺の將卒は常に余のスタートに臨んで其砲身に危くも衝突せんとする、余の苦心を目擊した同情者であつたからである。而して

此人達は一再ならず余が飛行機諸共に墜落せんことを恐れて海中に飛び込み余を救ひ出さんと用意して居たのである。

又余が嘗て屢此要塞の英邁なる司令官海軍大尉コウブ氏の客となつた折には、其都度余等は戰爭終了後、獨逸國に歸還する際の想像談を極めて面白く交へ、其時は言ふ迄もなく余は此會姓岬要塞の守備隊と共に同行する樣に約束したのである。

十月十七日の夕方遲く多くの將校の一團は呼吸をもつがず精神を緊張して海岸望樓に集つて居た。但し同所にある我々少數のものは其何の故なるかを充分に知つて居た。時に我老齡の驅逐艇S九十號（艇長は海軍大尉ブルンナー）が出動する事になつて居たのである。

彼は二晩前に夜暗を利用して大膽にも沖合遙に潛行して、日本の軍艦が我々を砲擊したる地點に敷設水雷を撒布したのである。

今日も彼は其の最も困難に感ずる最後の任務を果さんとした。即ち敵の哨戒線を

突破して敵艦一隻を襲擊せんとするのである。

それは天氣晴明な夜であつて、弦月は已に十時頃に沒して了つた。今や同驅逐艦が出發の時となつた。

十時になつた、十時半になつた、余等は精神の緊張を覺え殆んど堪へられぬ迄に無量の感慨に襲はれて來た。然もS九十號の影さへ猶末だ見えなかつた。

所が——遂に十一時となつた。我々は長い黝黑色の船影が徐々に眞珠山下の海上を沖合の方へと動くのを認めた。水兵達の慧眼は直ちに同驅逐艦と看破したのである。「諸君勇敢なる人々よ、諸君の進路に幸多かれよ！」

このとき我々は皆其心に期せずして、同驅逐艦の乘員に對し最も幸福なる前途を祝福し、熱烈なる祈願を蔭ながら籠めたのである。と思ふと小艦は我々の視線から遂に全く消え去つた、待つ間程なく敵の驅逐艦の哨戒線を突破するといふ至極危險なる時刻は來たのである。

我々の眼は恰も魅せられた樣に大海を凝視した。今にも探海燈の光芒と敵の砲火が閃くであらう。我等は怪光を見るか、砲聲を聞くかと固唾を呑んで期待して居たのである。

夜色は沈々、天地は寂然として、唯海上に濤聲の澎湃たるを聞くのみであつた。

時針は十二時となつた、次に十二時半となつた、魔(みそはれ)の氣持は我々の腦裡から取り去られて了つた。敵の驅逐艦は少しも認知しなかつたやうである。吁我S九十號艇は敵の本隊に肉薄して居るに違ひない。

一分は一時間の樣に長く感じた。何人も隻語を發するものはなかつた。

其折しも突然、一時頃に遙か南方に當て、遠き沖合に於て、巨大な火柱が現はれた。それから四方八方から搖動された燦然たる探海燈の光芒が幾條となく海面を照した。暫らくすると殷々轟々として遙に聞ゆる沈痛なる爆音と激震とを感じた。

嗚呼快哉！是れは實に我S九十號艇の大活動であつた。

一時半には我々は既に下記の如き無線電信を受取つたのである。

「本艇は三個の水雷を以て敵の巡洋艦一隻を襲撃し、三個とも悉く命中。同巡洋艦は直ちに爆破し沈沒せり。余は敵の驅逐艇隊に追撃せられ、歸路を遮斷せられたるも、極力南方に脫出を試む、萬一必要と認むる場合には余は亦本艇を爆破せん。署名ブルンナー」

此電報のみに依つても、我S九十號の艇長以下乘組員が如何に活動せしかを何人も認むるであらう。

其後の數週間余は意外にも南京に於てS九十號の乘組員に再會した。但し其奇遇の顚末は後章に於て述べやう。

七　青島に於ける最後の日

攻圍戰は着々豫定通りに進行した。日本軍は日毎に我々に接近して地中に堀り込んで來た、彼等は更に多數の重砲を適當の地に据へつけた、そして其先登の歩兵大部隊は我前線の堡壘に向つて夜襲をなしたが、全く擊退されたのである。我が堡壘及び殊に其前にある鐵條網や鹿柴等は間斷なく敵の砲火を被むり、又我大砲も之に對して殆んど砲身が赤くなる程應戰した。併し悲しい哉、我軍に我彈藥の貯へは乏しかつたので、遂に節約するの止むなきに立至つた。

攻圍戰が漸く長日月に渉つたのと、止む時なき砲火の激烈なるのとで、我々は恐ろしい程精神の緊張（之は我々が日々經驗して居たのである）を感じ、其憂慮は次第〳〵に昂進したのである。

余の神經も亦ストライキを爲し始めた。

食事をしやうと努めても出來なかつた、そして睡眠の如きは全く出來もしなかつたのである。夜になつて眼を閉ぢても、直ちに我心眼に地圖が見へ、又下の方には我防備區域が敵の爲め破壞されたり、荒されてる狀況があり〳〵と現はれて來る。其上頭痛はヅン〳〵鳴り、耳には飛行機の騷音がザワ〳〵響いて居た、そして其間に時折參謀長の言葉が聞こへて居た。

「ブリッショウ君、青島に取つては君は毎日の食物よりも重要な人である事を自分で思ひ給へ！常に僕の所に歸還して敵狀を報告する爲め、あの飛行機を損しない樣にし給へ！我軍の榴彈は極めて少數となつた。此乏しい榴彈をば君の偵察に依て發射するのである事を君は忘れ給ふな。君は充分に其重き責任を自覺して居なくてはならないぜ！」

然り、今青島の危機一髪に瀕する金輪際に余は少しも重任を忘れては居なかつた。

余の頭の中には敵陣地を考ふる外に殆んど何物もなかつた、そして余は心眼では何度も〳〵數時間敵陣地の上空を旋回して、果して余の報告する所が實際と異同なきかと仔細に觀察したのであつた。斯く自問自答して余は自から欺むかざるのを知つた。余の不注意の結果で我軍の殊更に乏しき榴彈が或は無益に發射せられはしないかなどゝ、自分で心を苦めて居たのである。

斯くして何時間も余は煩悶した揚句、翌朝三時頃になると心身共に疲れ果てゝ漸く微睡むのである。而して僅に佳境に入つたかと思ふと、余の義務を盡すべき時刻が來る、忽ち寢床から飛び起きる。すると、余の組立人がやつて來て飛行機の用意が出來たと報告する。

其時は少しも躊躇すべき餘地がないのである。

間もなく余は「鳩」の側に立つて、正確に機上各部の檢査を行ふを例としたのである

そうなると余の神經が無闇に亢進したり、身體が震へて音を立てるやうな事も屢

々あつた。

併し一旦操縱坐に就き、瓦斯の槓杆を手に握り、周圍の人々に「左樣なら」と默語して告別すると、余の心中に蟠る雜念は全く消え去り、余は沈著に心を落付けて責務を果しのであつた。

無事にスタートして、幸に數百メートルの高度まで來ると、其時は自ら精神が全く明快となつたのである。

更に最一つ余を特に苦しめた事がある、それは余が飛行機の中で馬鹿に淋しく感じた事、即ち常に唯一人で飛ぶといふ事であつた、若し、余の同僚が誰か一人でも同乘して居たら、假令其人が僅に余の方を見て時々點頭する位であつても、それは余に取つては多大の慰藉となつたであらう。

此頃數日間は天氣不良の爲めと、推進機の故障があつた爲めに飛行を中止したが、その後再び敵の上空に飛翔して見ると、馬鹿に種々の變化が眼についた。

其際余は空中で絶望の感に打たれ少時茫然としたのであつた。

脚下に見ゆる種々樣々の設備に對しては、一體何處から着手したら可いのであらうか？あの塹壕やZ字塹壕や諸陣地の錯雜した中を如何條道をつければ宜いのか？

余は全く意氣銷沈して了つて、思はず地圖を手から離したのである。

余は再び氣を取り直し、鉛筆を執つて下方を瞰んだ。すると直ちに余の周圍の事は一切聞えず、又見えないで、唯只敵狀を按じ、略圖を記入するに全力を用ひ、必要の注視を努めて居たのである。

十月二十七日は我々に取りて歡喜の情に堪へざる日であつた。此日カイゼル陛下より下記の如き電報が來た。

「朕は全獨逸國民と共に青島の勇士が總督の命令を遵守し、各自が能く其義務を敢行しつゝあるを喜び最大の誇とする處である。諸子は衷心朕が感謝を享けよ！」

我々は此令旨を見て、非常に喜んだ。苟くも青島に在る人達で此福音に接して心

臟の鼓動の高まらないものは一人もなかつたのである。我がカイゼル陛下には本國に於いていたく軍事に心勞あらせらるゝにも拘らず、此極東に於ける忠誠なる一小部隊を忘れ給はなかつたのである。

茲に於て我々は衷心に於て、爾今陛下が滿悅し給ふ樣に最後まで奮鬪して、其義務を盡さんと誠意を籠めて誓つたのであつた。

遂て十月三十一日となつた。此日は即ち日本の天皇陛下の誕辰の吉日であつた。我々は軍事探偵の言に依り、日本軍は此日を以て青島の占領を斷行するとの由といふ事を聞いた。余は今日の出來事を明細に叙述することは不可能である。

日本軍は前日の晩までに陸上砲壘の全部を完成したのである、そして此千九百十四年十月三十一日には早朝六時に海陸兩方面より我に全砲火を開いて、其戰慄すべき彈雨を我々の上に浴せ懸けたのである。

日本軍は當日第一着として石油槽に發砲して火災を起さしめた、快晴な青空に無

風の中を巨大な濃烟の柱が恰も我々の怒れる心に復讐を誓ふかの如く、高く天に冲した。陸上の日本軍は先づ口徑二十八珊の重榴彈砲を連發し、海面からは最も重大な海軍砲を發射して居た。榴彈の轟音、直射砲彈の叫び、榴彈及爆彈の炸裂する大音響、爆裂せる鐵榴彈の唸り、我獨逸軍に於ける重砲の轟き、――是等の音が相合して轟々たる一つの騷音をなして、其狀は恰も阿鼻叫喚の地獄を現出した樣であつた。

堡壘や其附近の土地は悉皆荒廢に歸した。山頂は全く破壞せられて、深い罅裂の孔を生じたのである。

猛烈な敵の砲火は終に夕方になつて止んだ。我々も敵も共に我軍の全堡壘は確實に陷落せしめられたと信じた、といふのは、彼等は丸で彈片の蒐集場なるかの樣な觀を呈して居たからである。然も我が忠勇な青年將校等の一團が其場所に馳せ行き急ぎ大砲の所に至つて見ると（大砲の全く土砂や岩石塊の中に破り、其砲身をも全く匿してあつた）殆んど總べての大砲が無難であつて多く損害を被つたもの極めて少

かつた。

其晩、夜半の頃敵の進擊縱隊が集合するのが聞えもし見えもすると思つた折しも、突然我が總べての砲壘が發砲を始め、其慘烈な砲火を敵の砲臺及行進せる敵軍の上に浴せかけた。夫故に此砲擊の効果は日本軍に取つては至極悲慘なものであつたに違ひない。

流石の敵軍も突擊は計劃してはあつたが、遂に實行されずに濟んだ。其次の日は漸く正午頃に敵砲兵の砲擊が極めて緩慢に行はれた。併し其結果は至極激烈のものであつて、小さき會姓岬要塞のみにても最大榴彈の完全に命中したものが五十を算じたのである。

日本軍は此夜の實驗に依り大に得る所があつたので、其後八晝夜の間といふものは、我等に對し一分間だも砲擊を中絶しなかつたのである。

此恐るべき砲火に就て、人間並の計算をすれば我軍の中一人も生存することはで

きなかつたのである。所が丸で奇妙なことには、我軍の死傷は少なかつたのである。然し日本軍の發砲は極めて巧妙であつた、但し其砲兵將校の一部は獨逸のユーテルボークで射擊學校に學んだ連中なのだから、其技能は敢て驚ろくには足らないのである。併し彼等の彈藥は兇暴なものであつた。そして之が我々に取つては幸運であつたのだ。

敵は猛烈な砲火を開き、急斜面を砲擊するに重砲を用ひたが、其成績は餘り良好でない。彼等は一回だも我穹窖や堡壘を破壞せず、爆彈に破られ難き塲所や、其他の要部は一箇所も敵彈に貫通されなかつたのである。加之不發彈の極めて夥だしかつたことが、我軍に死傷の少なかつた理由であつた。其後余は不幸にして獨逸國内に於て、「死傷數が少なかつたから、青島は當然のものではなかつたのだらう」と不平を鳴らす說を聞いたが、余はこんな人達に對して左記の如きことを示したいのである、即ち我々は五個の小さな步兵堡壘と一個の胸墻と一條の憐れむべき狹少な鐵

條網とを有する防禦線を一つ持つて居たのみであつた。

此戰線は延長六千メートルを算し、三千人に依り維持せられて居た。此上更に陣地を設け戰線を增加し、之を守備する兵員を得る如きことは絕對に不可能であつた、何となれば我軍の兵數は全體で四千人餘に過ぎなかつたのであつた。

夫故に今回八日間を通じて、大口徑の砲火を浴びせられた後に、鐵條網は全く吹き拂はれ、胸墻は打ち破られて見ると、三萬の日本軍（我等は此大軍に數週間對抗して來たのである）が突入して青島を開城せしめたことは極めて容易の事であつた。のである。

十一月の初め我軍は最終戰の準備をした。

十一月一日の夜半に忠誠なる同盟國たる墺太利の巡洋艦「カイゼリン、エリザベト」は其最後の砲彈を射盡した上で、勇敢な乘組員に依りて爆沈された。

數日の後我剛勇の小砲艦「ヤグアール」が墺艦の最期に倣て沈んで行つた。

其次には船渠、大起重機が同じ運命を追ひ、それから間もなく造船場も唯々彈片の堆積せる丘山と化したのであつた。

我軍の大砲は皆最後の彈丸を射盡して了つた、若干のものは敵砲兵の砲火の爲め破壞せられたが、大部分は各其任務を果たした後で、我軍の手で爆破したのである。

千九百十四年十一月五日に余も亦飛行機の破壞をしなければならなかつた、即ち今度は余の複葉機の番であつたのだ。余は甚だしく苦勞をした後で、元墺太利の飛行中尉クロブクツアール及我造船場の助力に依り壯麗偉大なる水上複葉飛行機を建造した。今や出來上つて居たので、余は之を操縱して余の偵察任務を續行せんと欲したのである、然るに今俄に之を破壞しなくてはならなかつた。といふのは、余の飛行場は僅かに敵との距離四五千メートルに過ぎなかつたので、絶えず敵砲火の見舞ふ所となく、其飛行機は到底今日以後の使用に堪へなかつたからである。

かくて余の複葉機は遂に何の用をもなさなくなつたのである。

我々の努力と辛苦とはすべて全く水泡に歸したのだ。

それから當日の午後に余は總督の面前に立つて居た、彼は余に言つた。

「我軍は毎日日本軍の總攻擊を待つて居るのです！君は明朝早く飛行機に搭乘して此城塞を脫出する事が出來る樣に用意し給へ！が僕は日本軍が迚もそれだけの時間を君に與へないかも知れんと心配して居る。

「さあ御機嫌よう、そして無事脫出して呉れ給へ、君が青島の爲め盡して呉れた偉大な活動に對して僕は感謝します！」

彼は斯う言つて余に握手を求めた、

「では御言葉に從ひ要塞から御暇を頂戴致します！」

そこで余は其役務を免ぜられたのである。

それから余は上官や同僚諸君に簡單な告別をした。余は大きな一束の私信の書類等を委托されたのである。

そこで余は我住宅に最後の歩を運んで、余の室や親しく世話になつた諸道具に別れを告げ、厩の戸を開いて小馬や鷄を出してやつた、それから飛行機の所に行つて其最後に於ける飛行の準備をした。

それから余は一心不亂に地圖を研究して殆んど必要の地名等を暗記して了つた、そして注意に注意を重ねて行程を測つた。

其後に余は夜の中に最後に點山頂に上つて行つた、此處には余の親友な海軍中尉アイエ氏が數日間の間最も重き砲兵砲火を豪つたにも拘らず頑として彼の小砲臺を固持して居たのである、又此處からは全青島及敵の前進陣地がすべて鮮やかに觀望せられるのであつた。余は此光景に魅せられ、只恍忽として長い間最高處の岩角に居つて居た。而して下の方を見ると猛烈に亂射する敵の大砲の砲口から濛々たる砲煙が湧き出で金色の麗はしい稻妻が幾條となく舌を揮る樣に搖動して居た、又我軍が下の谷間から發射する小銃及機關銃の砲火が海から海へと金糸の樣に搖曳して居た

のである。余の頭のすぐ上には數千の重榴彈の轟く爆聲が唸つて居た、是等の榴彈は其目的を達せん爲めに此山頂のすぐ上の所を掃蕩する必要があつた。余の背部には我が榴彈砲が其最後の挨拶を唸らせて居た、遙かの彼方青島の最南端からは、要塞の二十一珊が其黃銅色の雲烟を響かせて居たのである。

余は種々の感慨に打たれ魂の奥の奥まで搔き亂されてアイエ中尉の所に歸つて來た、そして親密な同僚間の告別を交はし、彼が余の今度の飛行に幸あれと願つて吳れた後で、我々兩人は互に强く握手して相別れた。

余は青島で彼と握手した最後の士官であつた。數時間後に彼は大砲を引き渡すのを欲しなかつたので、三十倍の優勢な日本軍に對し豪膽に奮戰した上で彼の小部隊と共に倒れたのである。

彼は實に尊とき英雄的精神を發揮して壯麗なる龜鑑を我々に殘したのだ。

其後の時間に、余は余の部下に屬する四名の勇敢な人々と余の飛行機の側にあつ

て、何時でも日本軍が襲撃を試み戰線を突破し來る場合には余は自己の任務を果たさんものと待ち構へて居た。

千九百十四年十一月六日早朝まだ殘月の明らかに輝いて居る中に、余の飛行機は萬端の用意を終えてスタートに立つて居た、推進機は恰も滿悅した樣に其朝の歌を唸つて居た。

此上徒らに時を過すのは遺憾である。我飛行場は日本軍の爲め、榴彈や鐵筈彈の砲火を浴びせられて居たので、余は地獄の中に居る樣に氣味惡く思つて居た。

其處で余は敏速に今一度機の全部を檢査し、余の四名の親友達に强き握手を交して離別の意を表し、我忠實なる愛犬の頭を撫でた、そこで余は全瓦斯を加へ、機は矢の如く夜の空に出發し去つたのである。

丁度三十度の角度で場の中央の上空に登つた折柄、余は恐るべき砲擊を受けたのであつた、余は漸く鐵拳を以て機を靜め、墜落を防いだのである。敵の一榴彈が丁

度余の下で爆發し、其爆音の爲め空氣が大に壓迫されて余は殆んど大地に墜ちんとしたのである。

併し有り難い事には榴彈の破片の爲め左方の翼が拳大の穴を受けた外、何等の損害も被むらずに濟んだ。

それからは唯普通の鐵筈彈が余の後方の屆いたのみであつた。之が日本人及其同盟の英人等の余に對する最後の告別であつた。

余は充分上空に昇つてから、一回後方を振り返つて見た。

そこには可憐な蕞爾たる青島、今日迄我々は祖國の爲め多くの事業を果たし、尙今後も持續しなければならない所の青島、我々の愛する第二の故郷、地上の樂園たる青島が横たはつて居た。

我が獨り淋しき高空までも大砲の轟音、榴彈の爆聲、小銃機關銃の銃聲は轟き渡つて居た。

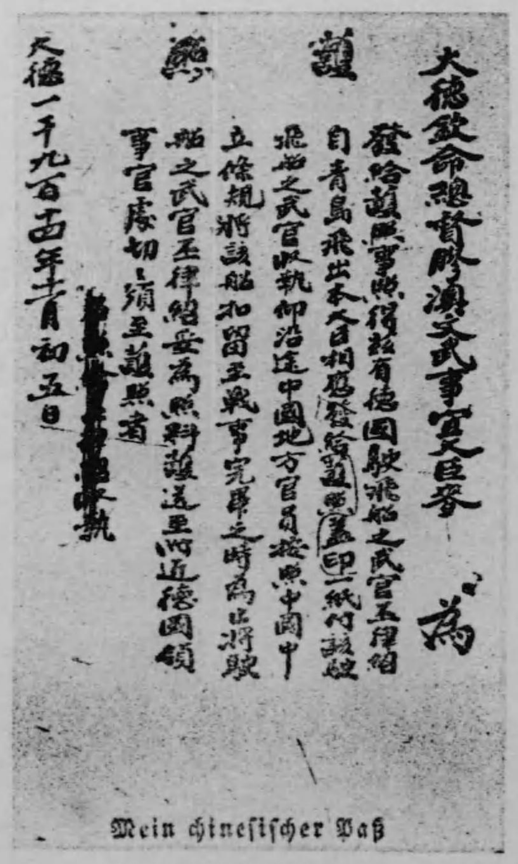
限りなく炎々と燃え上り聳へ立つ稲妻に照らして見ると明らかに兩軍の戰鬪線が認められた。今や正に敵の總攻擊が開始せられ、それに對し絶望的防禦が企てられて居る事の標號であつたのである。

我軍は果して能く第三回の襲擊を持ちこたへるであらうか。

余は下に向けて手眞似をした、左樣なら青島よ、そこで奮戰しつゝある我忠勇なる同僚よ、御機嫌よう！

此別離に由て余は限りなく悲哀を感じた、咽喉のあたりが詰まる樣になつた、で余は急ぎ飛行機を方向を變へ、イエシュケ岬に進路を取つた。

太陽が華やかに又雄大に上つて來た時に、余は既に高く青空の中を浮揚し、南方の荒涼たる連山の上空に向つたのである。かくて余は最近代式の「封鎖線破り」に成功したのである！



余の携帶せる支那の旅券

八　支那の泥田にはまつて

眞珠山の後ろに敵の艦隊は碇泊して居た。で、其儘には斷念出來なかつたので、今一度軍艦を旋回した。

それから遙かに〳〵殆んど一直線の進路を取つて南清の方へ、未知の地に向つて、不明の運命を齎らして進んで行つた。斷續せる荒涼たる山脈を越え、河流を越え平野を過ぎ、時には大海を跨いて、幾多の都市村落を下瞰して進んだ。

余は手頭大の地圖とコンパスとで空中より其位置を確めた。そして朝八時には早や二百五十キロメートルを後にして、幸ひ余の行先地たる江蘇省の海州府の方へ針路を定めて居た。

余は鋭意高空から適當な着陸場を探求した。併し此點は如何にも不利の樣であつ

た。

先達て中の大洪水の爲に土地は廣く遠く氾濫して居た。唯一の乾燥地點は家屋又は支那式の墓塚を以て蔽はれて居た。余は漸くにして長さ約二百メートル、幅二十メートルの小さな原野を發見したが、之とても兩側は深い溝渠や高塀で挾まれ、其前後は河水で取卷かれて居た。

着陸は所詮困難であつた。

併し何とも致し方はない。永久に天空に居る事も出來なかつたのである。其上余は今獨逸ではなくて、支那の眞唯中に居るのであつた。そこで兎に角此場所を見出したのを私に喜こんだ。

玆に余は大螺旋形の旋回をして下降した、そして急角度の滑走飛行（空氣の熱して居る爲め機は重苦しく降つたのである）の後、余は八時四十五分に泥濘深き田甫の中に下つた。

併し泥が甚だ柔らかく且つ粘土であつたので、余の操縱坐は立派に泥中に沈入して、車輪は固着して了つた。そして一回强く衝突して機は鼻をぶつつけて音をたて、最後の瞬間には殆んど顚覆して了つたのである。

推進機は破片となつて散亂したが、幸に余の手足は無事であつた。

折しも周圍の靜寂なることは余に一種異樣の感を與へた。余は是より數週間は此地に留まることゝなつた。最早再び大砲の轟音を聞かず、爆破する榴彈の聲も達せず、又破裂する鐵筩彈の唸る響をも全く耳に入らなくなつたのである。

我飛行機は機尾を高く空中に持ち上げ、嘴を深く泥中に埋めて、余の「鳩」は平和に靜かな日光を浴びて居た。

遠くの方から支那人が續々と詰め掛けて來た。男も女も澤山の子供等も恐怖の色を漂はして集つた。

彼等も亦余が是迄飛行し來つた地方の支那人と同樣に驚異の眼を睜つて飛行機を

見て、殆んど解することは出來なかつた、余は實に此地に於ける最初の飛行家であつたのである、そこで彼等は惡魔が災禍を齎らさんが爲め茲に自らやつて來たのだと考へたのである。

余が飛行機から這ひ出して、四五の人々を手招きすると、さあ大變になつた。彼等は泣叫びながら、怒號しながら、男子が先頭になつて皆んな驅け出した。彼等は後に殘した子供を犧牲として此惡魔に捧げる積りであつたのだ。實際、無智蒙昧の亞弗利加の蠻地に余が現はれても、箇樣に甚だしい恐怖を土人に與へなかつたであらう。

このとき余は即座に決心して群集の後を追つかけ、三四人の辮髪を引つ捉へ、悲泣する奴を飛行機の所へ引き寄せて、此大きな鳥は何人にも害を加へるものでないと云つて說明した。

暫らくすると余の計略は効果を奏した、若干の金錢を與へると、彼等は今回珍ら

しくも神靈が飛んで來たのだと考へ直して、飛行機を再び水平の位置に直すのに助力して呉れた。之を見ると、他の連中も犇々と詰め掛けて來て、機が壓し潰されねばいゝがなどと心配して呉れた。

支那人の驚ろきと言つたら、何んとも形容する言葉がない。彼等は指で恐る恐る觸つて見る其態度の滑稽なこと、只呆然の至であつた。又彼等が喋々喃々と饒舌を弄し、口を開いて哄笑する樣と言つたら、如何にも面白いものであつた。

余は是迄能く支那人を知り、又其如何に子供らしいかを辨へて居る。此とき余は自已の妙案を思ひ浮べて私かに微笑を洩したのである。

一群の自然兒が喧々怒號する集團の中にあつて、獨り余は快活に操縱坐の側に備へ置いた秘密書類を入れた葉鐵箱の上に腰を卸し、マウゼル拳銃を護身の爲め身に帶び、何でも御座れと構へて居た。

余は自分の身柄を支那人に了解させんとしたが、其努力はすべて無効であつた。

彼等はさも愉快らしく齒を剝き出して、頭から笑つて掛つた。

暫らくすると明瞭に「お早う御座います」と英語で話す聲がしたので、自分は此奇異な境遇から救ひ出されるのかと思つて、稍安堵の心を持つた。振返て見ると、我側に一紳士が立つて居て、「私は亞米利加の傳道會のドクトルモルガンです」と名告つて自己を紹介した。彼は心から慇懃な挨拶をして、堅く握手を交へた。余は直にモルガン氏に自分の境遇を説明し、其助力を得たいと言つた。(此人は殊に流暢な支那語を話すので好都合であつた)

余は間もなく自分が善き安全な保護の下にある事を知つた。

余は青島から持つて來た、馬鹿に大きな支那の旅行券を直ちに支那官吏に呈出した、すると一時間の後陸兵四十名の一隊が僅か十分の行程を距つた兵營から繰り出して來て、余の飛行機監視の役目に就いた。

余は朝食をとのモルガン氏の招きに快よく應じた、而して鎖附けや釘附けになつ

支那人の群　×　千葉德爾の飛行機後陸者に地内の郷

て居ないものは全部携へて、氏と共に傳道會に行つた。

此處で自分は最も愉快な歡迎を受けた。モルガン夫人、ライス夫人（亞米利加宣教師の夫人）G氏に紹介された、此人々は余に對して最も親切に種々の厚意を盡して呉れた。

自分が朝食をして居ると、支那の一士官が訪ねて來て、今自分の爲めに一中隊の儀仗兵が屋前に整列して居ることを告げ、余の希望は如何、余の身は恙なきや否やなどゝ尋ねた。彼は上官の命令に依て來た趣で、それから上官自身が三十分内に余を訪問する由を述べた。

余は箇樣に支那官吏の好意を受けて嬉しく感じた。

漸く十分もすると、更に他の訪問者が現はれ、海州府の道臺がやつて來て、挨拶をしたのであつた。

其應對の有樣は無類獨特のものであつた。余はペラ〳〵ベチャ〳〵言ひながら、

何度も〳〵限りもなく叮嚀に御辭儀をした後で、尊大に構へた此老年紳士の側に座つて居たのである。モルガン氏が通譯をして呉れたので、談話は間もなく賑やかになつた。

尋問は再三回に相重なつた。余は何處から來たのか、青島の現況は如何、余が空中を飛行して來たのは事實であるか、此地まで幾時間かゝつたか、余が飛べたことは何といふ魔法の術であらうかなどゝ愛嬌な質問が連發された。此とき迚も答へ盡せない程に澤山の質問があつて、通辯したモ氏も大に骨折つたけれども、中華國の君子は殆んど全く理解しなかつた。この際偶々奇妙な一事件も發生した。

かく我々が談話して居る中に、此家の主婦の所へ訪問者の通告があつた、そして其時綺麗な色絹の袴と、衣服とを纏へし極めて立派で小造の支那婦人が十人から十二人位までちよこ〳〵と蓮歩を運んで過ぎた。此可愛い支那人の中二三人が好奇の心と驚異の聲とを立て、我々男子の座つて居た部屋の前に立ち留まつて、小さな口を

開け、大きな眼を開いて立留り、余を凝視した。すると一言二言許り何事かモルガン夫人が叫んだので、婦人達は慌たゞしく立ち去つた。此奇怪な動作は何故であつたか、其とき余は全く了解ができなかつたが、其理由は後に知つた。上流の支那婦人が、其好奇心に依り紳士を冷かに凝視して侮辱するといふ事は頗る無禮無作法の甚だしい失態であるのだ。

此三人の婦人客も無禮の罪を犯したので眞面目な教訓を受けたのである。然し余は此習慣を喜こばなかつた、といふのは余は此可愛とも可愛い磨きをかけた樣な小さな婦人連をヂット見るのが好きであつたのである。

主婦モルガン夫人も亦支那婦人から種々の質問を受けて猛烈な襲撃に出逢つたと言つて居た。彼等は今朝叫びつゝ唸りつゝ此市を脅やかしたのは何といふ惡魔なのだらうかと頻に訝つた由で、主婦が其中には青島から來た人か一人坐乘して居たのだと告げると、彼等はてんで相手にもせぬ風で笑つて斯う言つた。「私達は暗愚で

あつて常に白人達に瞞着され易いけれど、然もこんな馬鹿〳〵しい事を信ずる程に暗愚ではないのだ」

それは兎に角、モルガン夫人は「今後二ヶ年間は土人の病氣、作物の凶作其他幾災がある毎に迷信深き支那人等は必ず飛行機の出現したお蔭だと言ふだらうし、又醫者達は殊更に此の如き事を利用するだらう」と斯う述べて哄笑した。

午前十一時頃、銅羅や太鼓や喇叭を吹奏しながら地方の長官殿が親らやつて來た。非常に肥滿した人であるが、頭はグリ〳〵坊主に剃つて、華美な絹布を身に纏うて威風堂々と室内に進んで來た。彼の挨拶は極めて壯嚴なもので、其敬禮の態度は極めて叮嚀で頭を殆んど地に觸れんばかりの御辭儀が幾回も〳〵繰り返されたのである。

同長官は余の健康は如何又希望は如何などと尋ねた上で、甚だ丁重に余の身體に對して充分の保護に任ずる旨を證言した後、辭して歸つた。

（用著服平）者著る立に側の豪道州濠ゝつ〳〵携ゝ一ダ一モるゞ貶玩りゝ機行飛

彼の歸路も來たときと同樣に壯嚴な行列であつた。

當日余は直に公式の答訪をなし、同長官から晩餐に招待される約束を受けて歸ると、直に飛行機の解體に着手した。

所が此作業は言ふは易いけれども行ふことは中々困難であつた。自分は螺旋廻を一つ持つて居ただけなので、他の必要の道具を搜し求めた。が思へば自分は支那に居るのであつた、正しく千年前と同じ樣な狀態を呈して居る地方で、螺旋廻や螺旋拔きなどのあらう筈はない。

余は漸く亞米利加の傳道會で斧を一つと鋸の如き物を一つづゝ發見した。

此道具を以て自分は仕事に取掛つた、自分は彼の永き時日の間忠勤を勵んで呉れた百馬力のマーシード式のモーターだけは如何しても破壞したくなかつたので、之を機體から鋸で切り離さんとした。併し製作が甚だ强固で容易に取脫せない。玆に至つて見ると、獨逸人の仕事は如何にも大丈夫なものであつた。モーターを取り外す

までに四時間もかゝつたのである、そんなに總てが堅牢に造つてあつた。

余は中立國の法規に從はん爲め、モーターを地方長官に交附し其保管を一任した。

其次に最も悲慘な事件が起つた。

飛行機の殘部は其機翼を取り除いても、猶都會の市門や街路を通過することができないので、止むなく余は之を燒棄しなければならなかつた。由て余は之にベンジン油を注ぎかけ、火を點けた、すると直ちに鮮やかな火焔を發して何物も殘らず燒けて了つた。

余は勇敢な「鳩」が燒け去るのを見た時には、恰も親友を失つた樣に悲痛な嘆息を洩した。

九　マツクガルヴ并ン氏の魚肉中毒

余は夕方前約を履んで長官の所に招かれた。

余が戸口から歩み出ると、前庭はすべて炬火と無數の大灯提の裝飾で輝いて居た。衛兵は武裝して捧げ銃をなし、大鼓は鳴り響き、樂隊員は唯支那人だけに快感を與へるやうな音樂を奏して居た。それのみか長官は其乘用の轎を送り屆けて余を迎へて呉れた。

余は決して此夕の愉快を忘れる事はできない。

余は青絹で飾られた、帷(とばり)つきの窓のある轎に乘つたが、之は八名の骨格逞ましき人夫が擔いで行つた。轎の前方と、兩側及後方には澤山の兵隊が劍付の銃砲を肩にして行進し、數十名の歩兵が裝飾用の大提灯を持つて進んだ。擔夫が力强く歩調を

合せて進み行く毎に、轎は靜かに上に下へと搖れ動いた。行進中は十分毎に一番前のものが其杖をコツンと土地に打ちつけて音を出して合圖をすると轎は停まり、擔夫等は擔ひ棒の肩を替へ、かくして又速歩で進んだ。

轎で進むこと四十分の後に我一行は長官の邸前に着いた。耳を聾せんばかりの音樂と指揮の聲と照り輝ける大提灯や炬火の光とが此處でも亦余を迎へた。巨大な表門の中央の扉が飛ぶ樣に開くと、中門の前には長官が自身で接待に出て來て居た。

多くの官吏連や武官達も玆に集まつて居た。是等の人々と儀式張つた挨拶を交へた後で、普通の薄い綠茶を侑められた。此席で余は感謝の微意を表する爲に、長官に進物として彈藥を添へた余のマウゼル拳銃を渡した。

彼は贈物を受けて大に喜こんで居た、間もなく我々は氣持よく食卓に就いた。大きな圓形の食卓がそこに備へられて、五十箇以上の器皿に山海の珍味が盛られて陳

べられて居た。此宴席は自分を主賓として區別する爲め余は勸められて先づナイフとホークとを取つた。そこで鄭重な食事が始まつた。余は其皿三十六品たけは數へる事が出來た。如何なる鮮肉佳肴と雖も、ないといふものはなかつたのである。愛らしい燕の巢から始まつて立派な鱶の鰭に至るまで、或は甘蔗の新芽のサラダとか雛鳥の鷄の蒸煮とか、美味の物は何一つ缺けたものはなかつた。すべての料理を自分は能く喫べて見た。其間長官は懇ろに余を歎待して呉れた。彼の皿に美味の片でもあると、それを箸で握つて自分の皿の上に移して呉れた。飲料には既に此地方に入り込んで居る壜詰のビールがあり、其他には燒酎があつた。

モルガン氏は此夜も亦最も厄介な通辯を受持たれ、賑やかな時には滑稽に陷ゐる程の談話を通譯しなければならなかつた。

青島の封鎖戰に日英兩國人の死傷、飛行機の話等が支那人には餘程興味があつたと見えて、質問は彼此各處から連發された。

宴會の了つた後、余は心の底から長官の厚情を感謝して同邸を辭して歸つた、その翌日に余は又親切な我宿主にも告別しなければならなかつた。

余は飛行機で着陸した時には齒刷毛(はやうち)が一本、石鹼一個、飛行服（肩巾のついた裝鎧服と脚袴）があつたゞけである。余は其他には通常服を飛行機内に携へて來た。今此服を着用した。當年五歳になる宣教師の娘が余の烏打帽（之は飛行機を解體して居る中に支那人が盗んだのである）を紛失したのを氣毒がり、其代償として自ら用ひ盡した古い氈帽を呉れた。そして夕刻に余は再び嚴肅な儀禮の下に送られて、長官より余の爲に準備せられたジャンク船に導かれた。

余の今後に於ける旅行の案内者兼儀仗兵は劉廷尉（此將校は海賊征討者として既に有名な人）と二名の士官と四十五名の兵卒より成り、其他に同船の乘組員が數名あつた。余は是迄の出來事の爲め今は倒れんばかりに身體が疲勞して、小さな船室に入つた、此處に板床の代りに蒲團や褥の附いた立派な臥嚢のあるのを見て、且つ喜

び且つ驚いた、之は注意深き彼の宣教師夫人が余の爲めに特に船中に送り呉れたものである。若し之がなかつたら、余の薄い粗末な運動服では隨分苦しかつた事であらう。寒さは恐ろしく嚴しく、大きな舷側の裂目や穴から風がヒウ〳〵吹き込む、蒲團の隅から星の光の閃ける天空さへ見えて居た。

余は身を横へながら昨日迄のことを思ふと、萬感が胸に充ち溢れた。遠く北の方を顧みて、我勇敢な青島の同僚の身の上を氣遣ひ、更に青島の運命を考へ、又余自身は彼地にて最後の日まで任務を果さんが爲め、幾多の危難を冒して砲火の間に出入したり、其他色々の經驗に出逢つたが、身體に微傷だも負はず、今日に及んだ事を追想して、獨り其幸運に感謝して居る中に、遂に睡魔に襲はれ、直ちに目を閉ぢ腕を組み、前後も知らずなつた。此船は進行の勢が極めて遲い。檣の頂上に結び留めた一本の麻綱の他端に二人の苦力が附いて岸に沿ひ潮流を溯つて曳いて居た。板浦までの第一行程は（余は飛行機で二十分間に通過したのである）實に一日半にて漸

く終つたのだ。後には速力も稍早くなつたが、殊に順風に乘じたので、帆を利用する事が出來て航海が一層愉快であつた。海州より南京まで運河を進み行つたのに滿五日を要した。

されど此旅行は余に取つて極めて興味深いものであつた。船は常に網のやうに大小の河流の交錯せる中を通つて、彼の隋の煬帝の開鑿した古くて有名な運河に入り、之を過ぎ楊子江に出で、次いで南京に向ふのであつた。我々は幾回となく海賊が横行するので評判な水路を通り、又從來歐洲人の足跡を印した事のない都市をも過ぎた風帆を用ひられぬ爲め、船を曳いて行かねばならぬ日には、余は例の劉將軍及び護衛兵の半數と共に岸に沿うて歩み、極めて興味深き都市の内部を歴觀し、殊に未だ嘗て西歐文明の何物たるを知らざる支那の民族をよく見た。支那の男女小兒等は皆家を出て群をなして我々一行の通過を眺めた。彼等は皆驚異の眼を睜つて余（多くは帽子を冠らずに歩いた）を凝視して居た。否、余が實際人間であることを確か

める爲め、彼等は余の體に其手を觸れて見たものが多かつたのである。

余の茶褐色な頭髪と碧眼とが彼等支那人には全く了解し兼ぬる謎であつた樣だつた。

余は散歩中又は船中に在るときでも多くは沈默で過した。親切な劉將軍はうまうま洋裝はして居たが、然もヅボンの膝の所には純支那式の紐を卷きつけて居た、そして彼の後頭部からは立派な長い辮髪の紐が垂れて、それが上衣の帶の中に艶やかに押し込んであつた。此男は支那語以外には外國語を少しも知らなかつたし、自分は亦支那語は一切啞同樣であつたから、毎日兩人は顔合しても眞に片言交りの挨拶に過ぎなかつた。そこで食事の後には（此食事は充分豐富なものではあつだが、馬鹿に蒜（にんにく）と葱の香がした）我々兩人は小さな船室に對座して、親しげに時々笑つた以外には何等の談話もなかつたのである。

遂に十一月十一日に我々には揚州府に到着した。其時余が如何に熱烈の情に動か

されて余が最初の新聞を掴んだかは讀者諸君も察するに難くないであらう。

今度こそ青島の運命は如何になつたらうか。余は是迄日夜此問題に頭腦を惱ました。今日は之に關し何等かの報道に接せんものと我心は焦慮りながら、「上海タイムス」の各頁を繰つて見た。すると其第二面に青島といふ題名が出て居た！だが然しこんな事はあるべき道理がない、あるべき筈がない！と思つて此卑劣な虚言吐き野郎に對して、倦厭の情と憎惡の念とを感じながら、一讀を試みた。

青島の卑怯なる降服

劍を交へずして城塞を明け渡す。

守備兵全部酩酊し掠奪を逞しうす。その次には色々と醜惡にして嘔吐を催ほす樣な事や下等極まる虚報が並べてあつて、余は侮蔑のあまり直に其新聞を引裂いて河中に投げつげた。こんな事を英國人が、あの青島であんな恥知らずの振舞をした英

國人が、我が勇敢な籠城將士の上に述べ立てるとは、誠に厚顏無智の至りである。

併し余は未だ此英國新聞紙の價値を知らなかつたのだ！後に至り余は上海及亞米利加に於て亞米利加人の新聞を見るに及んで全然違つた報道に接したのである。併し兎に角余は青島の運命、必らずや來らざるべからざる其運命だけは既に確かに知つたのである。余も亦丁度その時に其地を脱出したのであつた、余の出發後幾何の時日もなく其孤立無援の我同僚は優勢な日本軍に對し降服しなければならなかつた。

此千九百十四年十一月十一日の午後に余等は無事に南京に到着した。

停車場で余は水雷艇S九十號の艇長たる海軍大尉ブルンナー氏及其部下たる乘組士官等の熱心な歡迎を受けた。

我々は人車に乘つて、S九十號の將校下士卒等の抑留されて居る建物へ行つた、が實に驚いた事には余に對して早く既に一小室が用意してあつたのである。余が驚いて尋ねると、同僚の語るには、余も亦抑留されなければならないとかで、彼

等は實は骨牌遊びに第四人目の夥伴を得るので喜こんで居るとの事であつた。併し余は骨牌遊びなんか決してしないので、第一此事に對しては異議を申込んで置いた。第二に自分は抑留されるといふ問題を全然考へて居なかつたのだが、それは彼等に對して言ふべきものでないからこのとき少しも口外はしなかつた。

そこで自分は劉將軍と一緒に南京知事の官邸に赴いた。が不幸にも、否寧ろ幸に知事公は面會は出來なかつた。其代りに一老人の官吏が親切に面會して、余の今後の幸福を祈り且つ余が南京で快よく感ぜん事を願つて呉れた。

余は其幸福云々の事は感謝したが、其快よく感ずるといふ點に關しては自分自身の考があつたから頗る不平であつた。

それから余は劉將軍と別れたが、そのとき此男は其職責を果たしたと云つて大に喜こんで居た、そして余が人車に乗ると支那の一兵卒が嚴めしい軍服を着けて余に附いて來た。

余が驚いて之は何の意味だと問ふと彼は可なりの獨逸語で斯う言つた、「私は貴官の「護衛兵」です。當分貴官の保護をするのですから、それで今後は到る處に同伴をするのです」

藥が少々利き過ぎた！

之では約束に違ふのだが！

余は斯う心中に考へた。海州では明らかに此南京行は單に形式上の事であつて、そこへ到着すれば余の身は全く自由だとの保證があつたのである。

所が此處の官憲は余を抑留せんとするのであつた。

そこで余は支那人が余に對して抑留問題を言ひ出す前に、余の身の自由を奪はれる前に、余は迅速の所置をつけなければならぬ。余の最も不快を感じ不利であつたのは例の「名譽」の番兵なのだつたから、之に對する何等かの手段を發見しなくてはならなかつた。

此日の夕方我々士官一同は或る獨逸人の家に招待された。そこで余の計畫案は出來上つて居た。其招がれた家で余は數時間心地よく再三再四青島の末路を話した後で、十時頃に余を除くの外客人は全部解散し、彼の忠實な番兵を從へて歸つて了つた夫から三十分もすると、余に取つて此地を脱出するに絶好な時機が來たのである。

夜中に此家の主人が戸外に出て見ると、誰でもない、例の黄色の彼の番人が居るではないか。

さて余は大々的の苦境に陷ゐつた。併し余は當意即妙の決心をして、ボーイを番兵の所に遣つて彼に斯う告げしめた。「一體全體汝は何の爲めに立つて居るのだ、今夜の客人達は既に大分以前に解散したのだ、汝は彼の人達に追ひつくには疾走するより外はない、然うでないと汝は不注意の爲に罰せらるゝだらう。」

此哀れな奴が舌を垂れて皆の跡を追つかけて行つた間に、其時早く彼の時遲く幌を掛けた人車が飛んで來て、余はコツソリとそれに乘り車夫は全速力で停車場に驅

けつけた、そこでは新に開通せる線路の急行車が發車せんばかりになつて居た。漸くの事で一つ殘つて居る特別室を手に入れた、其室は全く戸を閉てあつたが、余が强くコツと〳〵敲いたので丈の高い一英國人が開けて呉れた、此男は睡眠を妨害されて佛頂面をして居た。無論こんな男は多く意にも介しないで、ワン、ツー、スリーで上の方の寢臺に上り、電燈を消して、恰も脱衣でもして居るかの樣に見せ掛けた。實は自分は蒲團や枕の下に這ひ込んで、若し何人か自分を尋ねに來たら、決して起きてやるまいと堅く決心して居た。此八時間の旅行中余は微睡だもしなかつた。

急行車が停車する毎に背中に寒さを覺え、はあ俺を捕へに來たなと考へた。又外の方で人聲がすると、今回の戰爭に於ける余の最後の追捕人が來たのだなと確信したのであつた。

所が何事も起りはしなかつた。犯罪人を逮捕するのに電信を利用することを知ら

ぬ、彼の支那人は有り難く感じられた。そこで汽車は豫定通り朝の七時に上海に到着した。此處でまだ鐵道改札といふ危險な斷崖があつたが、それも無事に通過して了つた。

それから人力車で大急に支那市街を通り拔けたが、此處迄は尙支那政府が余の身に對して支配權を持つて居たのである、その後で到頭余の俥は外國人居留地に入り込んだ。

ア一萬歲！余は全く自由の身となつたのだ！

余は斯う獨語して心に喜び勇んだ。今や何人と雖も自分を如何ともする事は出來なかつた。

自分は大恐悅の體で或る獨逸の知人を訪ねたが、彼は極めて親切に余を歡迎して呉れた。

滿三週間此地に逗留した後で、漸く大骨折の揚句今回の旅行を更に進める事が出

來た。

滿三週間といふもの毎日毎夜余は種々の經驗をなし捕縛の危險にも會ひ、幾度も隱れんぼを演じたのである。

海軍中尉ブといふものを多くの上海人が知らないとしても、そして又同地に數日間在住して居たマイヤー君が出發したとしても、开は少しも不自然な事はないではないか。

或る珍妙なスコット君が數日間親友を訪問したとしても、それは何人にも些の關係もない事だ。併し今自分は注意周到な態度を執る必要があつた。時に余は上海では知人が非常に多く、其一部には英國人及其他のもので、戰爭の少し前には青島で自分と一緒に居た連中もあつたのである。

余は四箇乃至五箇の名前を交互に使用し、又代る〴〵余の知人の所に宿泊した。だから支那人が一度位來たつて分る事ではなかつた！

余の最も困難を感じたのは如何にして亞米利加に行くかといふ事であつた。余は之に就てあらゆる方法を試ろみたが、何れも成功しなかつた。唯一回自分は英國船で殆んど發足した事があつた。之は實に面白可笑しい冒險であつた。余の一友人に英國の猶太人ペンニーといふ回漕問屋を非常に懇意にして居るものがあつた。或る日余は其友人と一緒にフエニヒ君（ペンニーの獨逸名）の所に行つて、一か撥か運試をして見た。其時余は粗末な服裝をして可なり世に捨てられた乞兒の樣な外觀を裝ひ、知らぬ人が一見すると悲哀な憐愍の情を催さしめる樣に努めたのであつた。余の知人は我々の訪ねて來た事を告げた、暫らくすると我々はフエニス君の嚴しい顏の前に出た（此男はデク〳〵脂肪肥りの人で蛙の樣に見えた）兩君は親しく互に相知つて居るかと思はれる程、挨拶もそれに應じて打解けて居た。

余は戸口の所に縮こまつて立つて居て、物耻しさうに裂けた靴を見たり、帽子を手で弄つたりして、無論英語でやつて居る談話は全く一語をも理解せぬ風を裝て居た。

余の友は談判を始めた。

「フエニヒ君、僕は君に一つ大事な頼みがあつて來たので、實は此處に汚ない小僧を連れて居るのです、此男の父は僕の知人であつて、以前は僕の親しく取引した間柄であつたのです。所で此いたづらつ子――年は漸く十七才たが――戀に陷つた娘つ子の事から父の所を逃げ出して、船の給仕となり、各地に流浪し、到頭此處で裸一貫になつた。彼は自分の不行跡を深く悔悟して僕の所へ尋ねて來たので。で、今僕は此若者を――尤も彼は瑞西人で英語は殆んど分らないのだが――之れを歐羅巴の方へ送り返したいのです、そこで君に御尋ねしたいのだが、どれか君の船に臺所働らきの口でもないでせうか。少々困らしてやる方が彼奴の將來の爲めで、自然其不了簡が消えて了ふ譯であるから、手荒い船長の方が却て適當だし、又それ相應の仕事をやらしてやりたいのです」

フエニヒ君は此話の最中殆んど一度も余をよく見ないで、唯時々輕蔑した樣にチ

ラと見るだけであつた、そして自分は彼に見られると明らかに悔悟する樣な風に裝ふた。フエニヒ君は斯う言つた。

「はあ、ありますとも、丁度そんなのにさせる仕事があります、今日午後「ゴライアス」が此處から直接桑港に向けて出發するのです（余は此處で聽き耳を聳たてた）その人は之に乘つて行けば可い。時々はひどくぶん毆られる事もあるが、何これは關つた事はない。では後刻電話で何時船が出帆するか確言して上げませう。六週間も著の皮剝きでもやると此若い人は大方爲めになりますよ」

そこで我々は共にフエニヒ君の家を退去した。

外に出ると余の友人が余の腕を捉へて馬鹿に烈げしく抓つた。其抓方が餘り强いので余は痛みに堪へず思はず大聲で叫んだ。須臾にして街路へ來ると、自分はもう辛抱が爲し切れず、ワハ、と心底から嬉しさを感じて大笑を催したので、通り過ぎる人々まで苦笑を禁じ得なかつた程であつた。自分が拵らへ事の芝居の間神妙に構

へて居たのは、實に不思議であつた。所が悲しい哉、自分は午後になつて其汽船が高潮の關係から二時間早く出發したといふ事を知つたのである。折角の演劇も之で臺無しになつた、渡航の方法は又初めから遣り直しだ。汽船は隨分澤山米國に行くには行くのだが、困つた事にはそれが皆んな日本の港灣を經過し、各地に數日間碇泊するのであつた。

余は可成日本を經由したくないが、唯何としても止むを得ない場合にのみ敢行することゝした。併し運命の神は自分を困厄の境遇に棄てゝは置かなかつた。或る日自分は數年前極東で一緒に樂しく一夜を遊び過した事のある一友人に偶然邂逅した彼は直ちに余の力になつて呉れた。夫より數日後に彼は既に余に向て必要な書類の世話を爲し、又正確な訓令を與へて呉れた。茲にスコット或はマイヤー或はブラウンなどゝ唱へ來つた素性の知れぬ一紳士があつた。同人は突然マックガルビンといふ立派な名刺の裕福な上等の英國人と成り濟したのである。此紳士は今度シンガー

ミシン會社の代表者として、上海からカリフォルニアの工場に旅行するのであつた。

此マックガルビン君が次回の米國の大汽船に乘船するといふのに無論何の不思議のある筈はなからう！

此船には立派な極上等の船室は唯の二箇處しかなかつた。其一つは已に亞米利加の百萬長者が豫約し、他の一つは海軍中尉ブリユショウ、いや是は失敬、何といふ無禮な事だ、實は右のシンガーミシン會社工場主のマックガルビン君が占め取つた。所で茲に今亦他の難問題が一つ發生した、といふのはマックガルビン君が人に知られずに上海をコツソリ忍び出る事だ。

此點にも余の知人が助力して呉れた。同船の出帆する三日前に余は上海に返留するのを甚だ危險と認めたから、之から北京に行つて、同地の獨逸公使館で勤務する積りだと言ひ振らして、余は處々の知人を訪ひ公然と告別をした。そして余は馬車に乘つて晩の八時頃停車場に向け出立した。御者が街路を幾回も曲折迂回して南方へ

急馳して此地を去て了つたのは余の全く記憶せざる處であつた。

無論余が上海の地理を知つてる筈はないのである。

馬車は二時間餘も呉淞河に沿ふて走つた後で漸く停つた。時に拳銃を身につけた二人の男が我車に向つて歩んで來た。余は之を見て合言葉を替し握手をした、それから余は車の中から余の方に差し出した二つの細つそりした白い女の手に接吻して感謝と恭敬の意を表した。そこで車は再び車輪を軌らせながら進んで行つた。此二名の知人は我車上に同乘して其中央に余を圍んだ。余も亦拳銃を取り出した、そして一言も發しないで我々の爲に早く既に河岸に用意してあつたジャンク船に飛乘つた。

其晩は空が眞暗で風はヒユーヒユーと唸つて居り、汚ない暗い河水はいやにざわざわ音を立てゝ流れ、干潮につれて我船の側を氣早に過ぎて行つた。

腕に全力を込めて櫓を操つた四人の黑影は支那人の船頭であつた。で一時間餘もすると我々は船内に蹲踞つて河流を下り彼岸の目的地に達した。

我々は微音をも立てずに岸に著き、ジャンク船も亦微音を立てずに暗中に消えて了つた。三人は徐々に暗い建物に向て歩いて行つたが、それは大きな製造工場の近傍で小さな庭園の眞中にあつた。

我々は徐に入口の戸を推して入ると、室内に電燈が煌々と輝き、我々の身體を直射する樣に強く照り光り。余の兩眼は殆んど眩せんばかりであつた。

此處は瀟洒としてよく整理された獨身者の住宅であらうと余は氣附いた。間もなく食卓が用意されて、我々は豐味な食物を貪り食つた。それから彼等は余の爲め戰爭の計畫を立てたのである。

此住宅は日中そこの工場で働いて居る二人の青年の家屋であつた。屋内の設備は言ふ迄もなく純支那式であつて、余の眼にはそれが却てよかつたのである。

余が此家に滯在したことは如何なる事があらうとも是非共秘密に保つて置かなければならなかつた。當時此處には「協約國」に屬する一人の面白からぬ男が住んで

居たのであつた。

我々は支那人の惡魔に對する恐怖、殊に其狂人に對する迷信を利用せんとした。余の任務は至極簡單で、滿三日間狂人の眞似をするのであつた。

余は小さな部屋を貰つて、其中に閉ぢ込められた。ボーイは其主人から十分に言ひ含められ且つ威嚇されて居たので、何事も裏切らるゝ事はないと確信した。

余は驚ろいた、狂人の眞似をするのが、こんなに困難な事だらうとは、全く考へて居なかつた。三日の間自分は此部屋に幽閉されて、怒號したり亂暴したりして居た、そして時折はヂッと靜かにして馬鹿の樣に安樂椅子に靠れ込んだ。

外で立番をして居るボーイは、こうして靜かになつたのに氣がつくと、用心深く戸を開き、更に一層注意して食物の盛つた盆を差し入れ、それを我側の卓上に置いた。それから電光石火の樣に其手を引き退けたのである、余は明らかに彼が外から鍵を錠に入れて廻はした時に彼がホット一息して安心するのを知つた。余は時々

悦の餘に大聲を擧げて呵々と笑ふと、此勇ましい黄色人は屹度余の病氣が亦募つたのだと信じたのである。

第三日の夕刻に余の身が開放さるゝやうになつた。

余の茲に來た時と同樣に用心に用心をし、音一つ立てないで、我々三人は共に此家を去つた。

上陸場には大きな蒸汽船が待つて居た、余は衷心より一言の挨拶をして彼等に告別をした、そこで汽艇は流を下つて吳淞の碇泊場に行つたが、そこには巨大な汽船「モンゴリア」號が繫留して居た。

其日は天氣が惡く河水が荒れて、舷梯は下りて居なかつた。掛りの者が色々と呼んだり叫んだりした揚句、漸く骨折甲斐があつて舷梯が下ろされた。そこで例のトランクを手にしてマックガルビン君は遂に舷に登つて行つた。

モンゴリヤ號では誰れ一人余の爲に船室の心配などして吳れるものはなかつた。

甲板には半分だけ電燈が輝いて居た、で余は結局船の役員の所へ行つて余の船室を尋ねた。其返事として彼等はいや〳〵ながら唸つて居たが、それは獨逸語にすれば「五月蠅い、止めて吳れ」といふのであつた。併し余は此連中に乘船切符を見せつけて遣ると、突如形勢が一變した。彼は丁寧にお辭儀をしたり、お詫びをしたりした。一役員が相圖用の笛を吹くと、いそ〳〵と白人の賄長を先頭にして澤山のボーイ共が駈け參じた。甲板の燈光も明るく輝やき出した。ボーイ共は例のトランクを引き上げて、勤め振り甲斐〳〵しくボーイ長は余を極上等の船室に伴れて行つた。彼は禮を盡して鄭重に待遇した。

「マックガルビンさん、なぜ貴方は今日御乘船になつたのですか、船は漸く明後日の朝出發するので御座います、其事は今日の正午上海中に廣告したので御座いますが！」之を聞いて余は佛頂面をして、極上等な船室の所有者としての余にこの事を通告しないのは不都合だと怒つてやつた。

それから肥滿した余の船室附屬の支那人ボーイがやつて來た。此男はいやに氣取つたハイカラな優男であつて、余は初め何んだか見覺がある奴だと思つたが、能く見ると余は狼狽せん許に喫驚した。彼は彼の下働らきのボーイをして余のトランクを船室内に運び入れしめて、如何にも不審らしき面相で、余の顏を凝視し荷物は全體で之だけですかと尋ねた。

「そうだ」余は斯う言つた。

「成る程、他の御荷物は荷物室にあるのですね？」と彼は語つた。

「無論よ、重いトランクは既に昨日積込んで了つた、大丈夫荷物掛りは余の貴重な大トランクに充分注意して居るだらうな」

吁！無邪氣な支那人が余が此トランク一つ持つて居るだけで威張り散らして居るのだと知つたらどうであつたらう！それに之さへも恐ろしく輕かつたのに！

千九百十四年十二月五日の夕方に「モンゴリア」號は遂に錨を揚げて動き出した。

出帆後天候はよく、食事は美味かつたのに、其翌日マツクガルビン君は俄に病氣に罹つた。それがどんな病氣であつたか。彼自身でさへ明確には言へなかつた。他の人が一見した所重い魚肉中毒であつた樣だ。で即刻船醫を呼び寄せ診察を依頼した。此男は立派な人で、徹頭徹尾遊獵家肌の人物、いみじき諧謔さへあれば何時でも推參仕るといふ代物であつた。大病だと言ひ觸してある人の寢臺から、華やかな褐色に日燒けをした顏がヌツと出ると、初め心配さうであつた彼の容貌は忽ち驚愕の風を帶びて來た。

余は彼を信頼した、そして言葉寡なに余の境遇を彼に語り聞かせた。余が彼に余の罪を告白すると、此醫師の兩眼は喜悅のあまり、余が是迄殆んど見た事のない程に鮮やかに輝いたのである、折から高聲に哄笑し、力强く握手をしたので、余は大丈夫此男なら間違がないと知つた。ボーイが扉を敲いた。

醫師は心配さうな勿體面をするし、病人は呻吟して居た。

注意深いボーイは滑り込んで來た、それで醫者は靜かな明瞭な音聲で彼に向ひ斯う言つた「おいボーイ、此方は大病人なんだ、少しも邪魔をしてはならぬ、十日以内は起き出る事は六箇敷い。料理人に注意して一番上等の食品を拵へさせて、いつもそれを寢臺まで運んで上げて呉れ、此方が御用のあるときはすぐ俺を呼んで呉れ」

此談話の間にも余はもう夜具の端を口に頰張つて居た、若し之が長く續いたものなら、余は夜具を全部鵜呑みにしたかも知らぬ。

三日程航海すると三箇處の日本の危險地中の第一のものに着いた。船は徐々に進航して長崎港内に投錨した、すると時を移さず税關吏や巡査や警察官吏等が雪崩を打つて船内にやつて來た。合圖の振鈴が船中に鳴り響いた。乘客は一同、乘組員も同樣檢閲を受ける爲め上甲板に集合せよとの叫びが船内各所に傳はつた。そこで檢査や訊問が始まつた。乘客はサルーンに集合した。乘客は各自一人も洩れなく男女であれ、又老幼であれ、一々其姓名を呼び出され、警察官吏と地方官とより成る數名

の委員に依りて訊問せられ、旅券は嚴重に照合せられた、其次には日本の醫師に依り傳染性病氣の有無を檢査せられた。取り分け彼等は青島から來たといふのは誰だか正確に知りたがつて居た。三十五番目の姓名が呼び擧げられたが、之はマックガルピン君であつた。一同周圍を見廻はしたが、無論何人も此男を見たものはなかつた。そこで醫師が進み寄つて極めて意味ありげな顏をなし、日本の同僚に、思ひ遣り深く肩を聳やかしながら、怖ろしき話を耳語した。

其れから二十五分もすると余の船室の前に澤山の人聲が聞えた、戸が極めて注意深く開かれた、そして米國人たる船醫が先づ入り來り、其次に日本警察官が二名と日本の醫師が一名とが余の室内に忍んで來た。哀れなる魚肉中毒者は夜具にくるまり、輕く呻吟して居て、外からは房々とした頭髪が少し見えるだけであつた。

船醫が寢臺の所へ近く進んで來て、注意深く余の肩に觸れたが、表面それが多大なる痛みを與へた樣であつた。すると直に醫者は寢臺の所から引き退つて、靜かな

半濁音で斯う言つた。「餘程惡るいのです、餘程」日本人共は最初から此恐ろしく立派な船室に來ると、怖々四周を見廻はして居たが、餘り見慣れない病人に近づくのを厭ひ、急ぎ出て行くのを却て喜こんで居る樣だつた。そこで彼等は幾度も丁寧にお辭儀をし、彼等の特殊な恭敬の念を表はす爲めに切口上でハイ〳〵と音を立てながら輕く「失禮しました」と言つて去つた、之で黃禍は全く去つて了つたのである。

此お芝居の前後を通じて余の心には頗る惡寒の發作を覺えたと信ずるが、それも其後間もなく直ちに鎭靜した。

午後は大膽にも一寸起き上つて、余が以前から知つて居る長崎の陸地を船內から眺めた。

併し眼前の光景を見ると又急ぎ寢臺に這入つた。此港は無數の汽船が輻輳して居て、それがすべて滿船飾を施して碇泊して居た。是等の船の上には日頃見られない光景が現はれて居り、到る處に軍隊や馬匹や大砲が陸揚せられ、兵士はすべて祝祭

日の禮裝をなし、家屋は殆んど全く彩花や旗飾りで被はれて了ひ、老若の男女は喜色を其面容に湛へた。

數へ盡せない程の人の山は市內各處を動搖めきて祝祭場の方へと進んで居た。此處では分列式や觀兵式が行はれたのである、之で分つた。「彼等は青島の凱旋兵士であつたのだ！」日本國中に此の日全獨逸帝國の滅亡克服も祝はれて居たのだ。英語で書かれた日本の新聞で、自分は此夕色々讀んだ中に、英國人や佛蘭西人や露西亞人等は獨逸國を征服する事にまだ成功して居ないが、日本人たる彼等は既にこれを完成したので、今や疑もなく全世界の最善最强の軍隊であるのだと書いてあつたのを見た。だが、そんな馬鹿〳〵しい事は澤山だ、亞米利加人、英國人も全くこれと同樣な事を仕上げて居るのだ。

此旅行中に船は更に二回日本の港に碇泊した。神戸に於ても橫濱に於ても余の船室では長崎に於けると同樣な出來事があつた、即ちマックガルビン君は依然病氣で

あつた――毫も日本官吏の干渉を受けなかつた。全體では五日間我は日本に居た譯だが自分が滿八日の間寢臺に何の不足もないのに(病氣だけは不足して居たのだが)横になつて居た揚句漸く余等は危險界を通過し去つたのである。そして日本の海岸が後ろの方地平線上に消ゆると、此汽船の上甲板に若い男の姿が現はれて、喜こびの餘り丸で狂氣した樣に跳び廻り、其小さな帽(それは以前は極東に於ける五才の一少女のものであつたのだ)を日本の方に打ち振つて笑ひながら叫んたのである。

「左樣なら日本の野郎、左樣なら日本の野郎!」

こんな大汽船では種々な餘興娛樂が行はれるのであるが、それをして居る中に月日はドシ〳〵經過して行つた。船中には又今後の戰爭で日本の土地より退去を命せられた獨逸人も多數あつた、余の同僚の一人で今迄上海で活動して居たものも居た、余の戰友即ち亞米利加の戰地通信員ブレース君も居た、此人は青島の攻圍戰を終始見盡した唯一の外國人であつた。

海の神は種々の變化を與へて呉れた。ホノルに近く到着する頃、我々は强烈な颱風を正面に受け、それが二日間繼續じて船は危險な狀態で搖動した。

我々が日の光の麗かな中を過ぎてホノルに到着すると、余の眼に信じられぬ事が起つた。前の方に當つて獨逸の軍艦旗が飜つて居るではないか。然も之は毫も疑を容れるに足らない。

本船が碇泊すると、其側に胡桃の殼の樣に小さな我巡洋艦ガイエルが碇泊して居たのである。此船は後に聞く處では南洋から數ヶ月の航海をして此處まで來着し、抑留せられたのであつた。何たる不思議な邂逅であらう!余は久しく其消息を聞かなかつた僚友に戰爭の眞最中鄕國から遠く離れた此地で、大事件の後に會合したのである。そこで互に問ひつ語りつ殆んど盡る所を知らなかつた。

獨艦ガイエルは戰爭突發の際遠く南洋の珊瑚島の散在する中にあつた。其乘員は露國に對する動員の事は知つたが、それから無線電信が破れて、何事も知らずに太